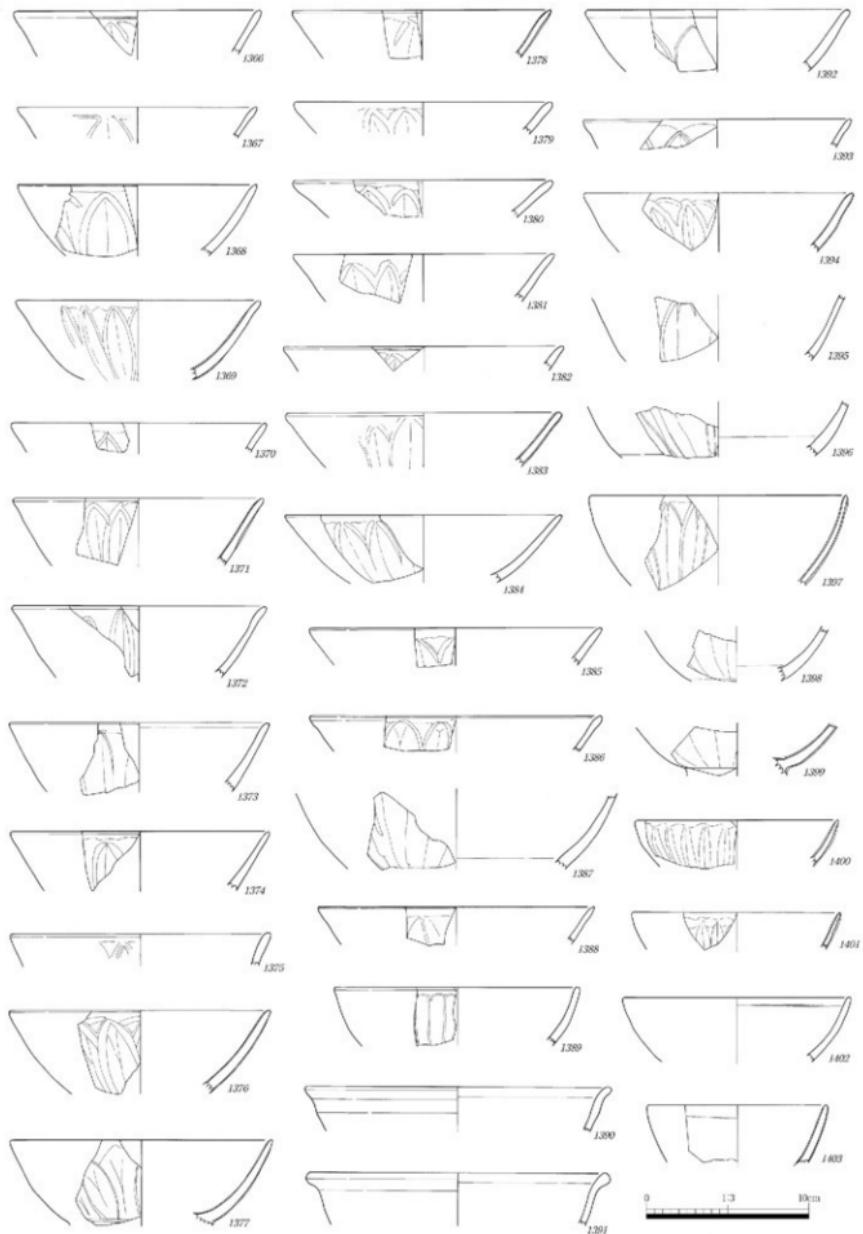


第250図 遺物実測図



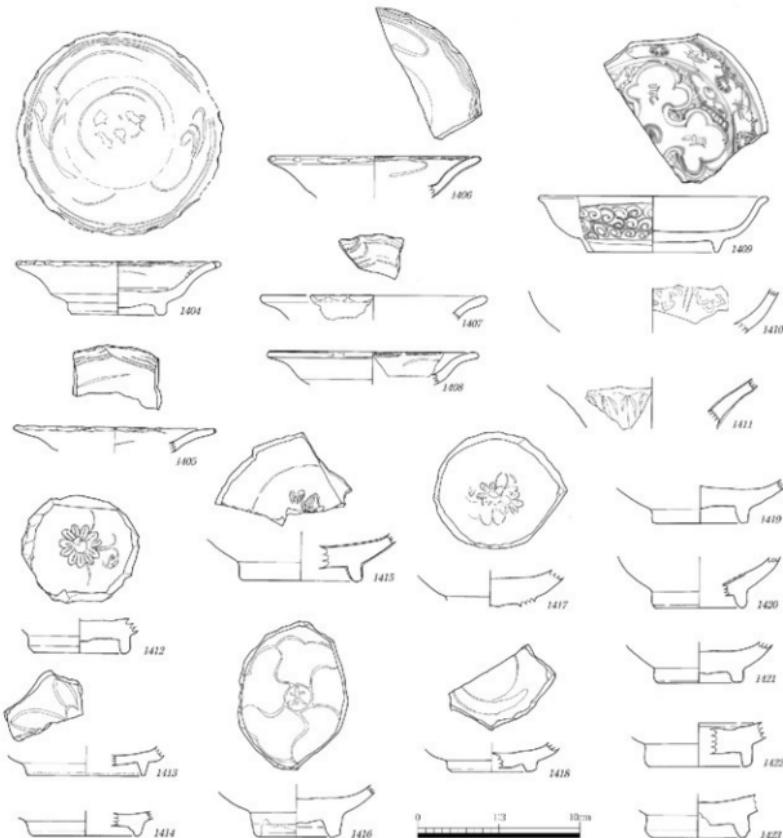
第251図 遺物実測図

八尾（1431～1454）

1431～1438は鉢。1431は小型で、S K419B13から完形で出土した。1432は口縁部が内湾する。1437は口縁部内面に2つの孔。1438は底部に不規則な卸目が残る。1439～1449は壺。1449は口縁断面がN字状で、S K87A4からまとめて出土した。1450～1454は壺。

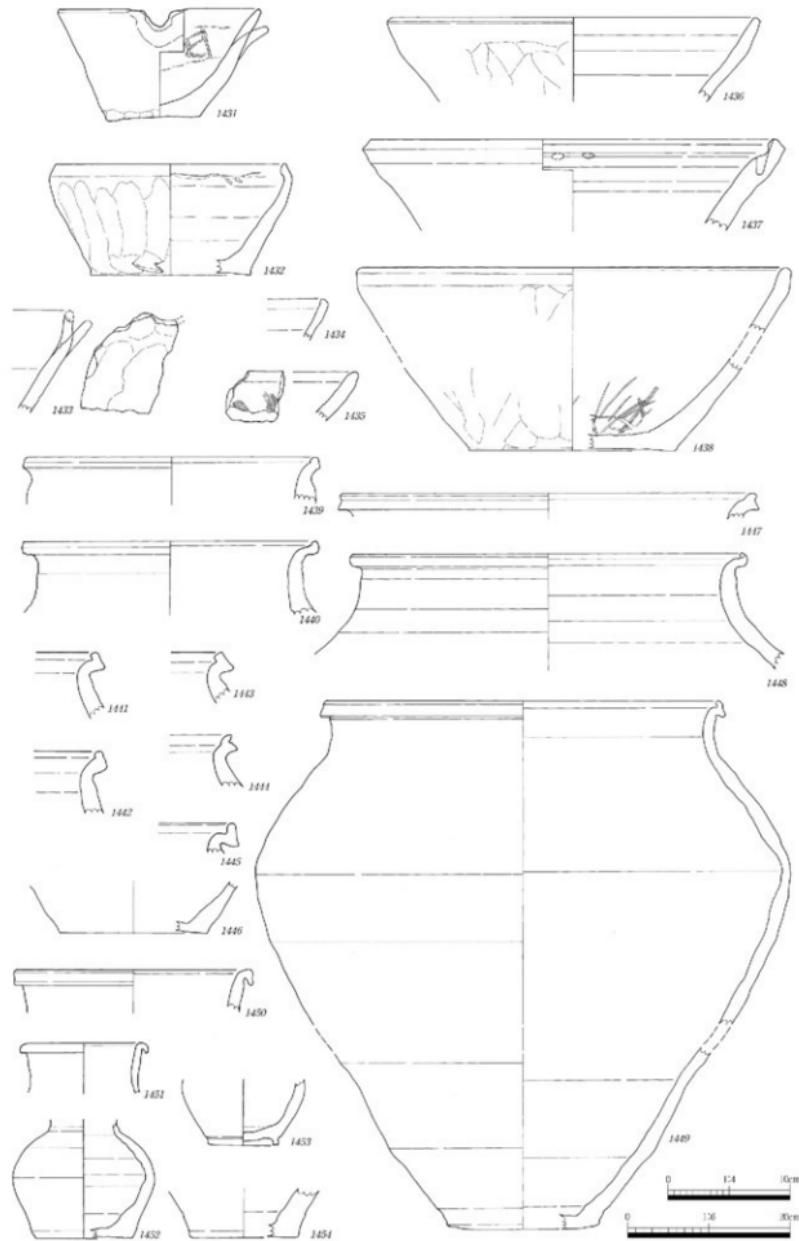
その他の中近世陶磁器（1461～1495）

1461～1478は瀬戸。1461の皿は見込みの釉を蛇の目剥ぎする。1469は合子か小壺の蓋。1470～1473は卸壺。1465、1474～1477、1486は天目茶碗。1478は瓶子、いわゆる三筋壺で、肩部に印花あり。1479は信楽の壺か。1480、1491は越前。1491の小壺は肩部に線刻があり、内面には錆状の付着物が残る。お歯黒壺か。1481～1485は越中瀬戸。1484の皿は高台内に墨書きあり。1487～1490は伊万里の紅皿。1489、1490外面には「○○小町」という商標が記される。1492～1495は瓦質土器。1495は燭台脚部か。

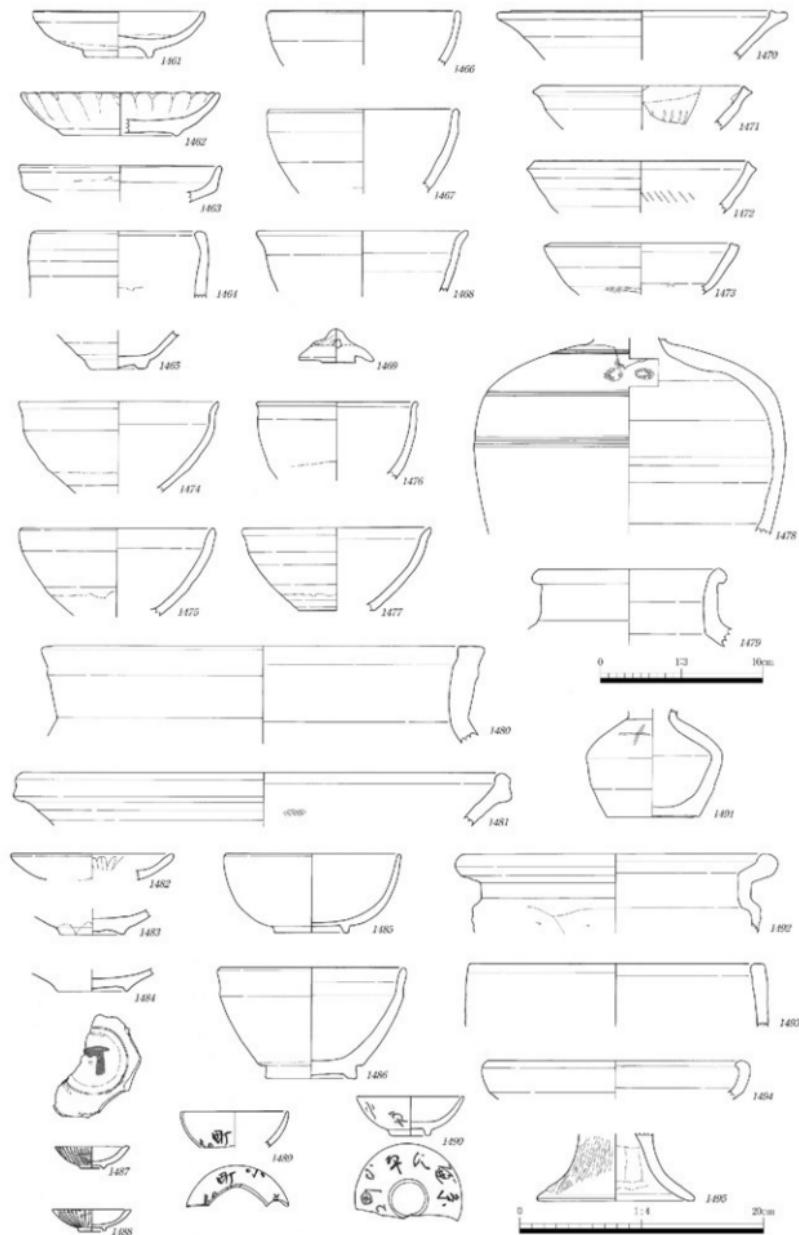


第252図 遺物実測図

4 遺物



第253図 遺物実測図 (1431~1448・1450~1451 1/4, 1449 1/6)



第254図 遺物実測図 (1461~1479・1481~1490 1/3, 1480・1491~1495 1/4)

(2) 土製品（第255～256図1501～1531、図版64）

1501～1520は土錘。上師賞の管状土錘で形態は提灯型、寸胴型、樽型がある³⁵⁾。

1521～1523は製塙土器。すべて小片で、能登型の尖底部。胎土は粗く、砂粒が多い。

1524～1530はフイゴの羽口で、内外に被熱痕や熔着物がみられる。

1531は懸仏の鋳型で、顔の左部分と左半身部分の2片が接合する。ともに谷C 6から出土した小片である。法量・色調等は観察表に詳しいが、欠損部分を復元した鋳型の推定値は長さ約20cm強、幅18cm程度にならうか。

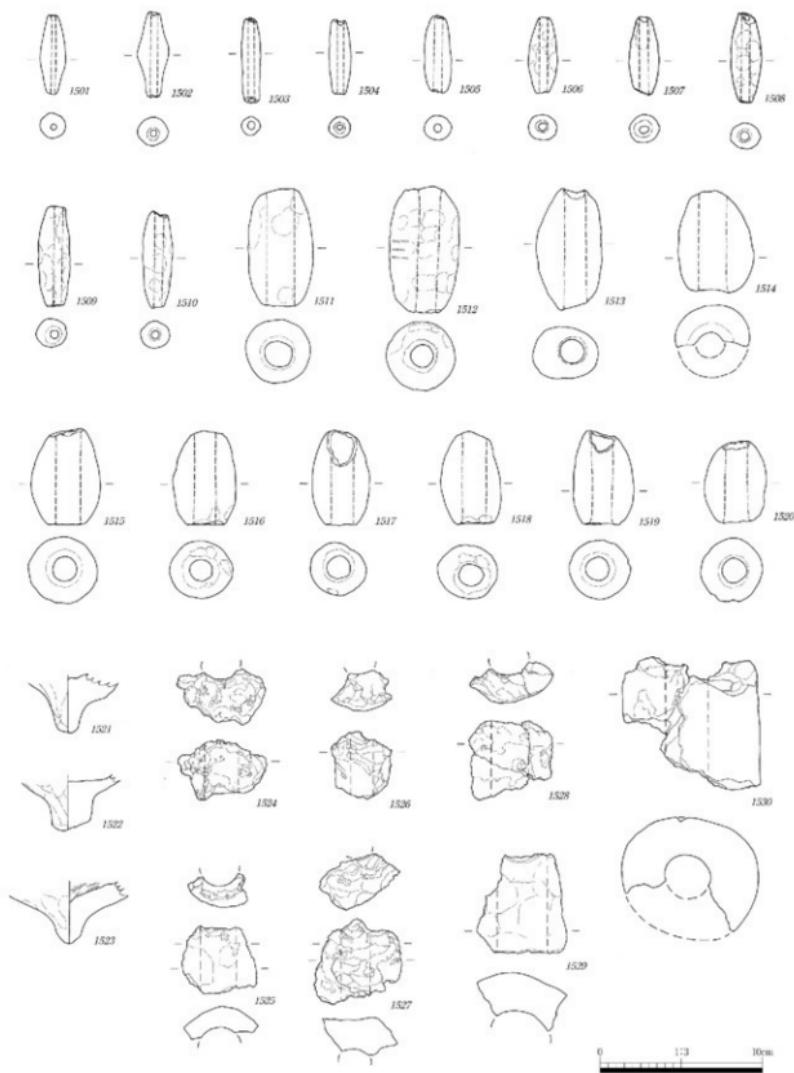
頭～顔部の特徴から如来像の可能性が高く、肉薄な形態は半肉彫り技法で12世紀代に帰属する懸仏とみられる。この時期の懸仏は類例が数少なく、平安時代後期の作として中尊寺円乗院および地蔵院の伝来例が知られる。懸仏は仏像をモチーフとしながら神の御体として神社に由来し、なかでも熊野信仰に依拠する例が多い。また、製作時期と考えられる平安時代後期は末法思想がピークを迎えた時期であり、そのような時代背景から、出土した鋳型は国の中ののみならず仏教活動が盛んに行われていたことを示すものとして評価できる³⁶⁾。

鋳造の觀点からは、鋳型の材料には割れを防ぐため糞・糊穀を混ぜた粘土を使っており、内面（仏像表面）にも石英粒がみられることから、ほぼ单一の土で作った可能性が高いとの所見を得た。ただし、滑らかな表面に仕上げるために気泡等を潰して鋳造を行うのが通常であることから、何らかの離型剤を塗布していた可能性が高い。鋳型は全体の厚みが一定で、成熟した技術者の製作が想像される。また、目鼻立ちや衣の線の残りがシャープであることから、原型が木彫であった可能性も考えられる³⁷⁾。

なお、実際の遺物を用いて型起し実験を行った。結果、彫り込んだ線を細密に復元できたことから、鋳型の表面はそれほど剥落しておらず、残りのよい状態であることが確認できた³⁸⁾。



型起し実験（平成20年9月18・19日実施）



第255図 遺物実測図



第256図 遺物実測図

(3) 木製品 (第257~283図1541~1871、図版65~73)

C 6地区からの出土が圧倒的に多い。特に谷C 6からの出土が多く、祭祀具と考えられるものほか、用途不明の加工材が多量にある。このほかにも木棺、掘立柱建物の柱根、木側の井戸からはほぼ一通りの構築材が出揃っている。

これら出土木製品について樹種同定分析を行ったところ、試料のうち9割がスギという結果で、用途を問わず多岐にわたってスギ材を利用していたことが明らかとなった¹⁹。

また、放射性炭素年代測定（以下AMS）の結果では、伐採年代8~13世紀という時期幅が示された²⁰。特に柱根の試料では時期にばらつきが生じているが、これは掘立柱建物の時期差であると同時に、建築材の転用によるものである可能性も否定できない。

以下、主な木製品について種類毎に記述する。

1541~1549はS K916 C 6出土の木棺部材である。1541は底板で、中央と両端には1542、1544、1545の横桟が接着されていた。AMSで900~1020 A.D.。1543はわずかに残った棺蓋の一部で、蓋板となる板材に別材が直交方向に接着されている。1546~1549は側板。長辺となる側板には、底板の桟を受ける孔が開く。なお、蓋板や側板の多くは柾目板を使用している。

1550~1552は木棺北に副葬されていた折敷である。漆器椀2口と漆器皿4枚が重ねて納められていたが、腐食が激しく取り上げは不可能な状態であった。折敷も辛うじて形を留めているような状況であるが、側板には木釘孔が確認できる。

1553、1554は埋葬の際、墓坑内に埋められたとみられる細長い板材。葬送時に使用されたものであろうか。1554はAMSの結果、1010~1150 A.D.で、木棺部材と時期が重なる。

1555~1561は漆器椀。1555はケヤキ、1558、1559、1561はブナ属を使用する。いずれも渋下地の普及品で、丸に沢湯文、鶴丸文などを赤色漆絵で加飾する。

1562~1565は箸。断面には円形と扁平な梢円形がある。

1566、1567は杓子。1566は細かい加工痕が残る。シロダモ属を使用。1567は表側に赤色漆が塗られ、柄部分には压痕状の凹みがみられる。

1568~1575は折敷の部材とみられ、木釘が残るものもある。1569、1573、1574がスギ、1570がヒノキである。

1576は曲物の小片で、裏側にはケビキが残る。1577~1579は円形の底板。1579は組み合わせ式で木釘孔がある。

1580~1584は下駄。1583がケヤキ、ほかは全てスギ材である。1580は差し込み歯部分。1582、1583では表面に足の压痕が残る。1584は小ぶりなサイズである。

1587は肩骨。谷C 6から出土した。4本の肩骨は要で留められた状態で出土し、実際に120°程度まで開閉が可能である。要部分にはちょうど肩骨一枚分程度の隙間があったため、出土位置が近く、材質、加工が同一とみられる板を加え、5本骨の肩と推定した。肩は長さが55cmのスギ材で、肩面側を全て板目とし、見栄えを意識しているようである。また、要に近い部分ではわずかに赤色漆の付着や、肩骨の側面には何かが剥がれたような塗料状の付着物が残っており、類例および使用例²¹から、肩面に紙等を貼っていた痕跡と考えられる。新潟県糸魚川市山岸遺跡で類例が出土している。

1585は先端の角を面取りし末端は尖る。1588は薄い板状で、末端は削けたような状態である。1589は先端に抉りを入れて、頭部とした人形の可能性がある。1590は念入りな加工でくびれを削り出した人形か、あるいは柄の様なものと考えられる。1592は先端を扁平な方形とし、抉りを入れた形で1589

の類例か。

1596は鳥形、S E161C 3の底から出土した。薄い板状で、細部まで丁寧に加工された平面的な形代である。

1597～1611は谷C 6から出土した端部に鋭い加工のある一群である。1597、1599、1606は両側面から削り出して先端を加工しており、1597、1606の末端には刻みがある。同様の刻みは1598にもみることが出来る。1600、1601は丸みを付けて削り出しており、刀形の可能性がある。ただし、刃部分を薄造りとはしていないことから確証に欠く。さらに1602、1603をはじめ、先端部を斜めに加工したものについては、刀剣形の可能性がある。1607、1608は半円状の加工がある。両者とも欠損のため、全體形が不明である。1609、1610、1611は先端を尖らせ、末端は多様な刻みが施されている。1609以外は完形であることから、長さの揃った一連の道具、部材と推測され、組み合わせなどにより使用したものであろうか。

1612～1623は弧状の抉り加工があるもの。1622、1623は長さ2mを超える大型品で、幅や厚みが類似する。ほぼ同一地点から出土しており、セットでの使用が推測される。

1630は半梢円の中央に抉りが入り、末端は欠損している。

1632は宝珠を半分にした様な形狀で、側面には繊かな加工が残る。

1633、1634は先端部が尖り、末端は抉り状の加工。1634の中央部には溝が彫られる。

1635、1636は左右対称のリボン形であるが、糸巻き具等の実用品であった可能性もある。

1659、1660は中央に孔がある板材で、1660は正方形の角を落としている。

1661は方形の突起、1663は方形の凹みと小穴が規則的にあり、両者は対にならないが、それぞれ組み合わせで用いる部品とみられる。

1665は表面が滑らかに加工される。両端の加工が異なり、先端は突起状に小さく削り出し、末端は両側面を緩く抉って削り、端部を二股に加工する。金沢市上荒屋遺跡に類例があり、機織り具の一部とも考えられている。

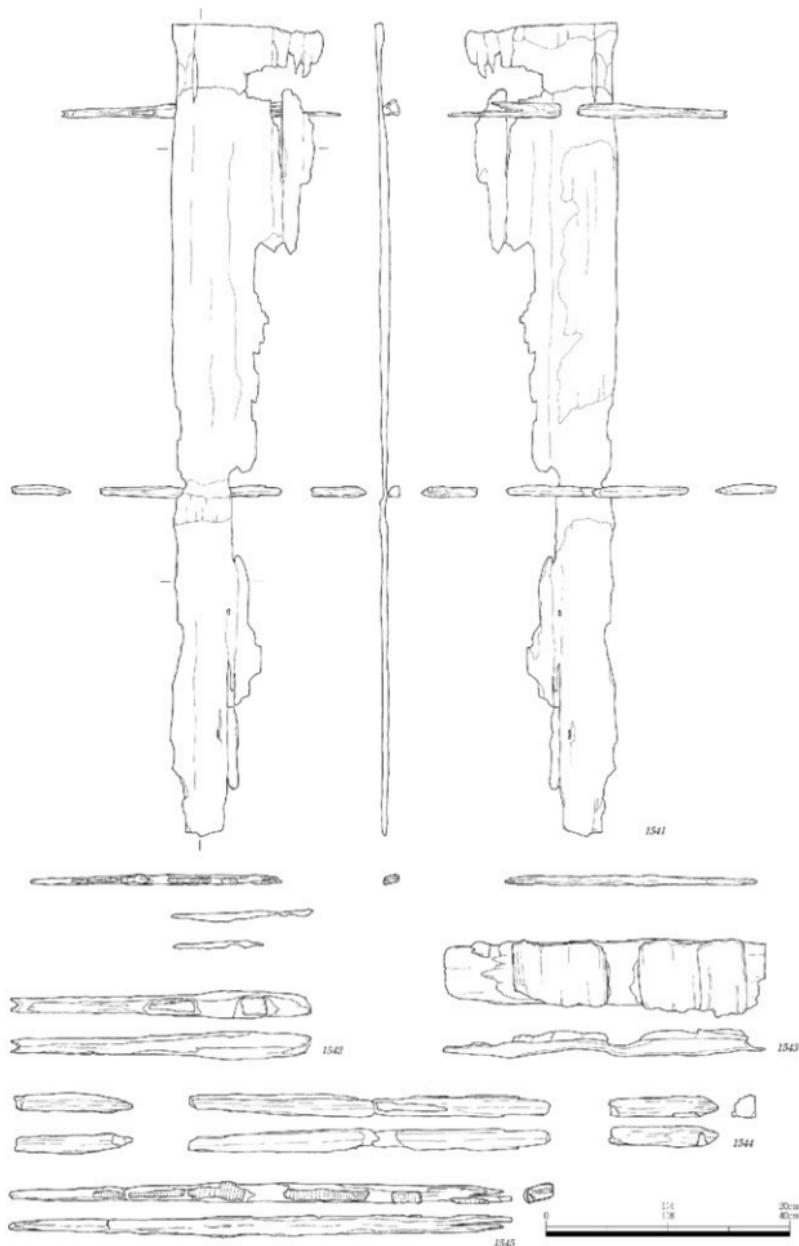
1666～1670は末端を尖らせた杭状の棒材である。

1637～1647はC 6地区の掘立柱建物の柱根である。全てスギ材で、AMSの結果、最も古いもので781～940AD、新しいものは1050～1220ADと時期に開きがある。残りの良い1645、1647では底面に加工痕がみられる。

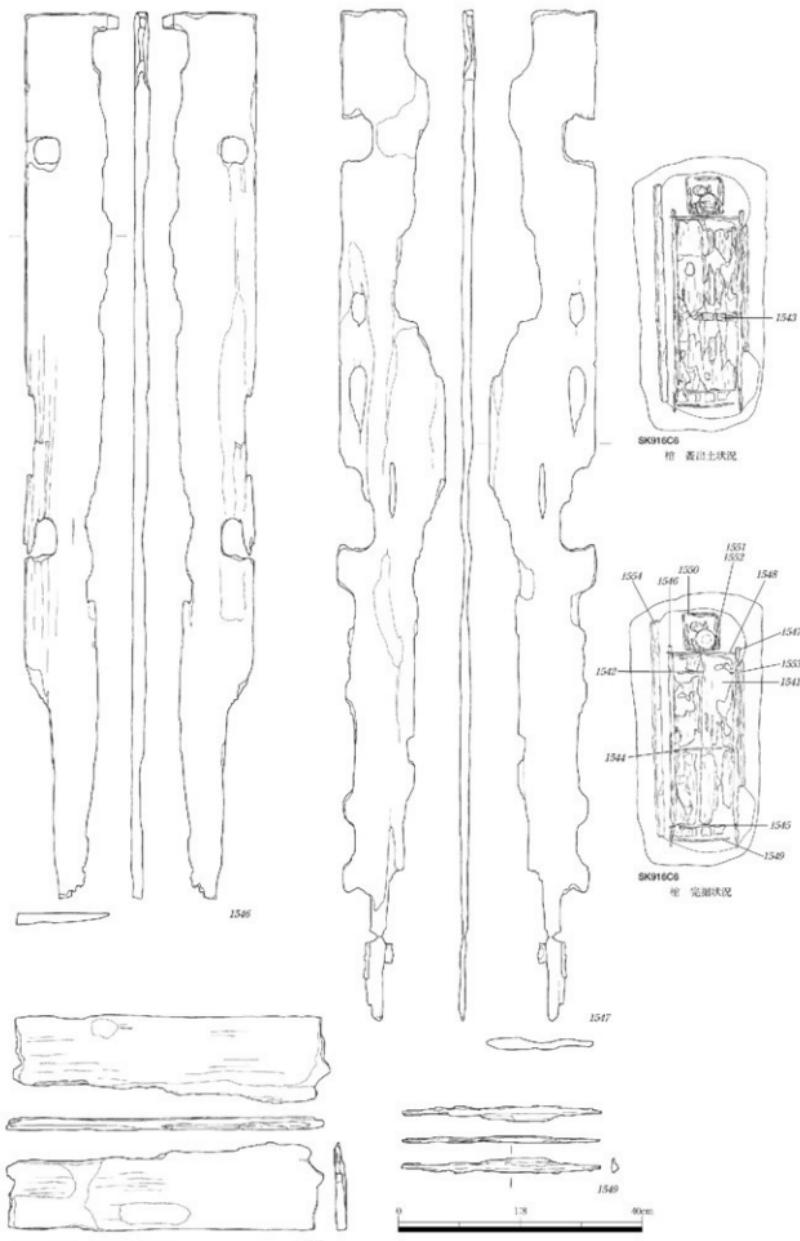
1690～1692はSK13A 5から銅鏡と共に出土した。表面には銅鏡の痕跡が青銹化しており、銅鏡を挟んでいたものと推測される。

1693は布片で、SK4 A 5から六道鏡を包んだ状態で出土した。分析の結果、平織りで素材は苧麻であった。

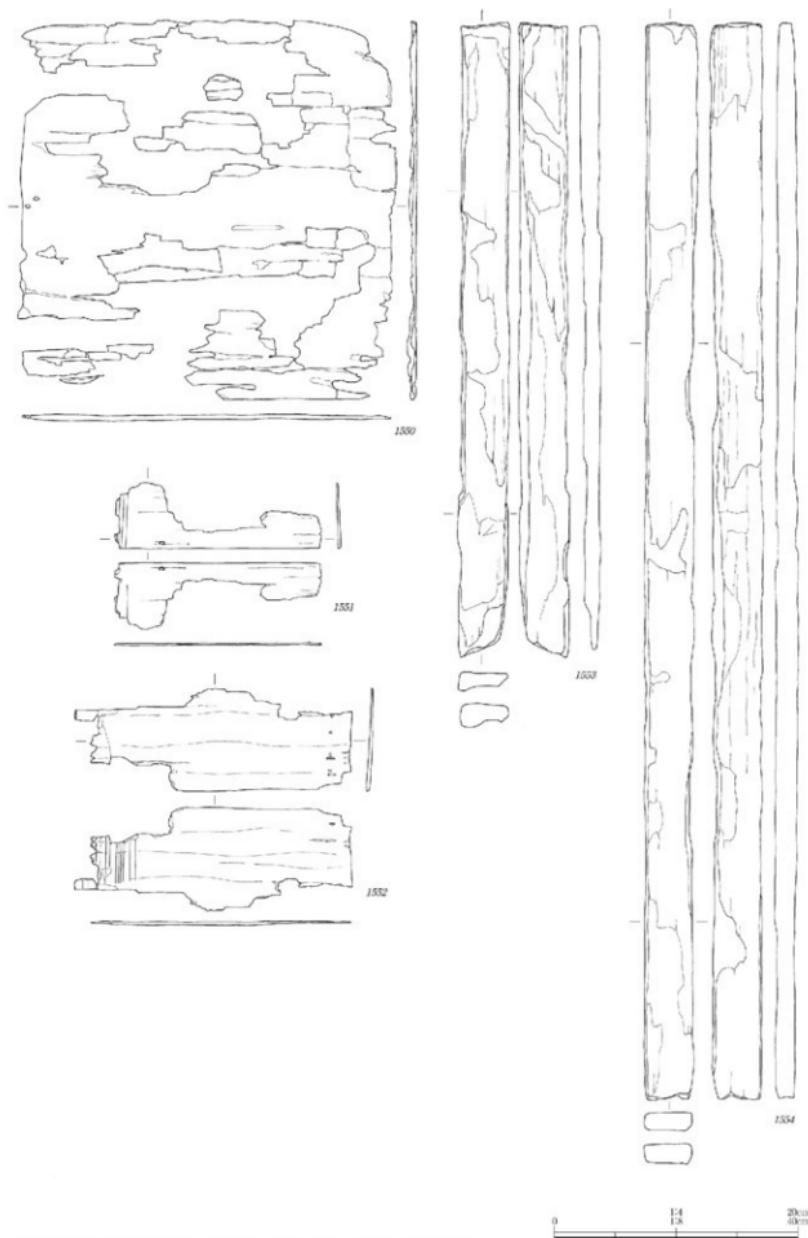
1694～1871は木側井戸の構築材。SE820C 6、SE19C 4は特に残りが良く、隅柱、横桟、側板のはば全てが出土した。これらの中には、黒ずみ、小穴、木釘孔等の残るものがあり、転用材が含まれていたと考えられる。樹種はばばスギ材に限られ、隅柱、横桟は分割角材、側板は主に板目板が使用されている。1800～1820は継板に使われた側板。厚みのある板材が用いられ、底面の加工痕まで明瞭に残る。1788、1789はそれぞれSE103C 3とSE159C 4の水溜用曲物である。1789は擁と考えられ、樹皮による縫じと底部に木釘孔が残る。



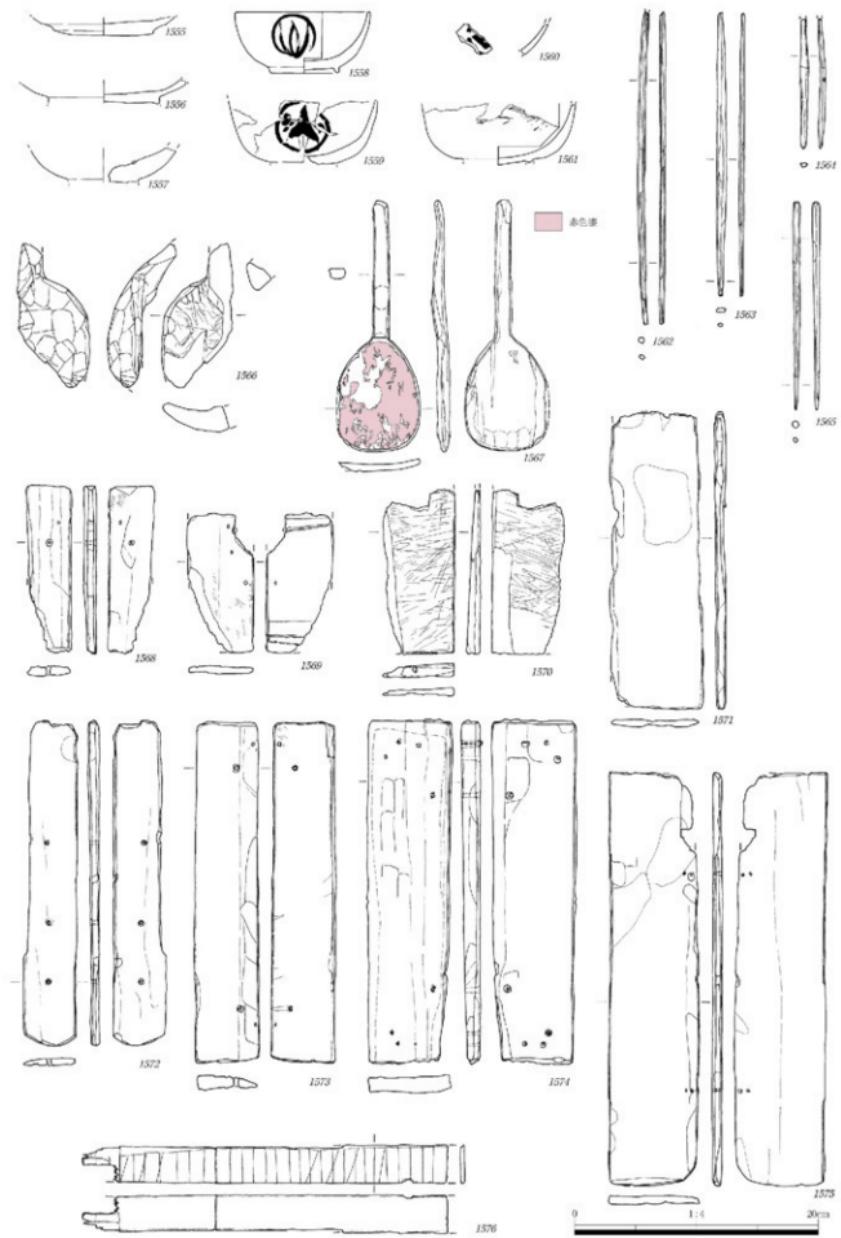
第257図 遺物実測図 (1541 1/8, 1542~1545 1/4)
SK916C6 (1541~1545)



第258図 遺物実測図
SK916C6 (1546~1549)

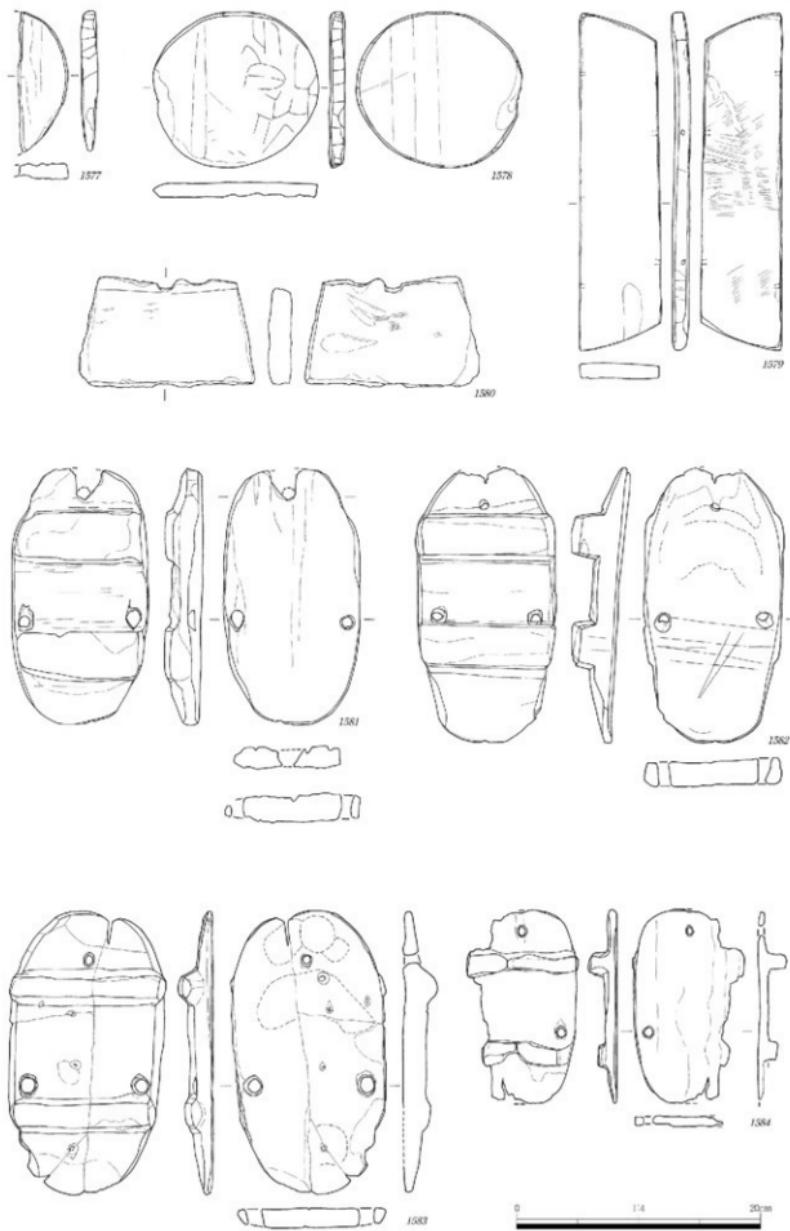


第259図 遺物実測図 (1550~1552 1/4, 1553・1554 1/8)
SK916C6 (1550~1554)



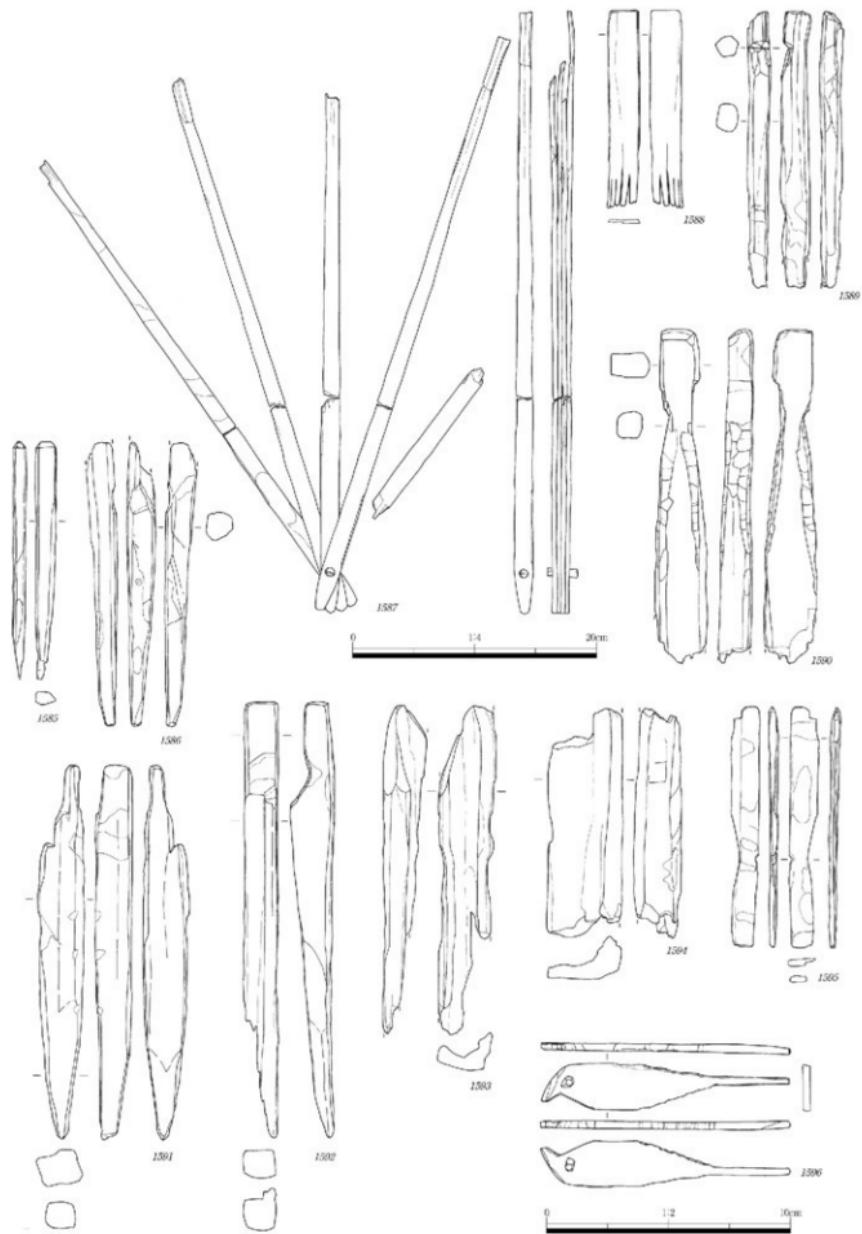
第260図 遺物実測図

谷C6 (1555・1556・1562・1563・1566・1568・1569・1572～1576) 川C6 (1558～1561・1570)
SD1B10 (1567) SE161C3 (1564) 包含層 (1557・1565・1571)

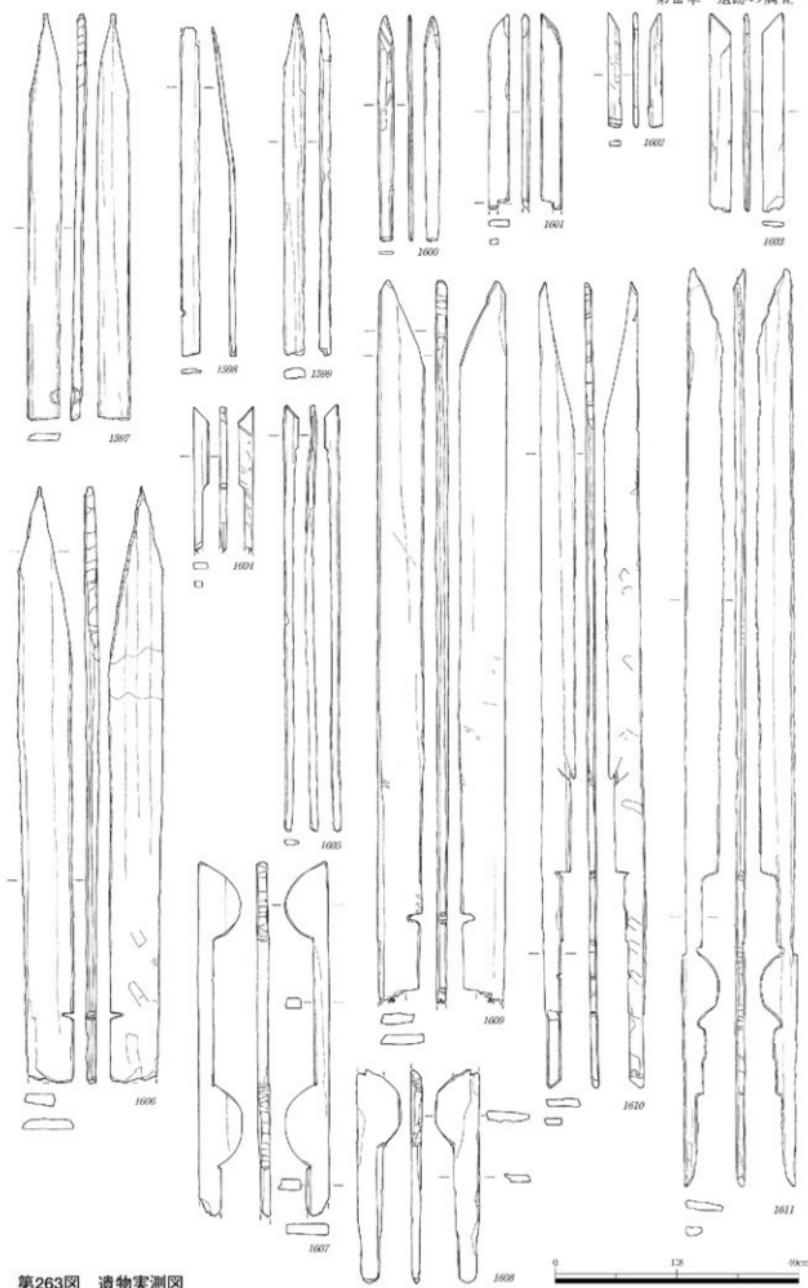


第261図 遺物実測図

谷C6 (1577・1578・1580~1583) 川C6 (1579) SK27C6 (1584)



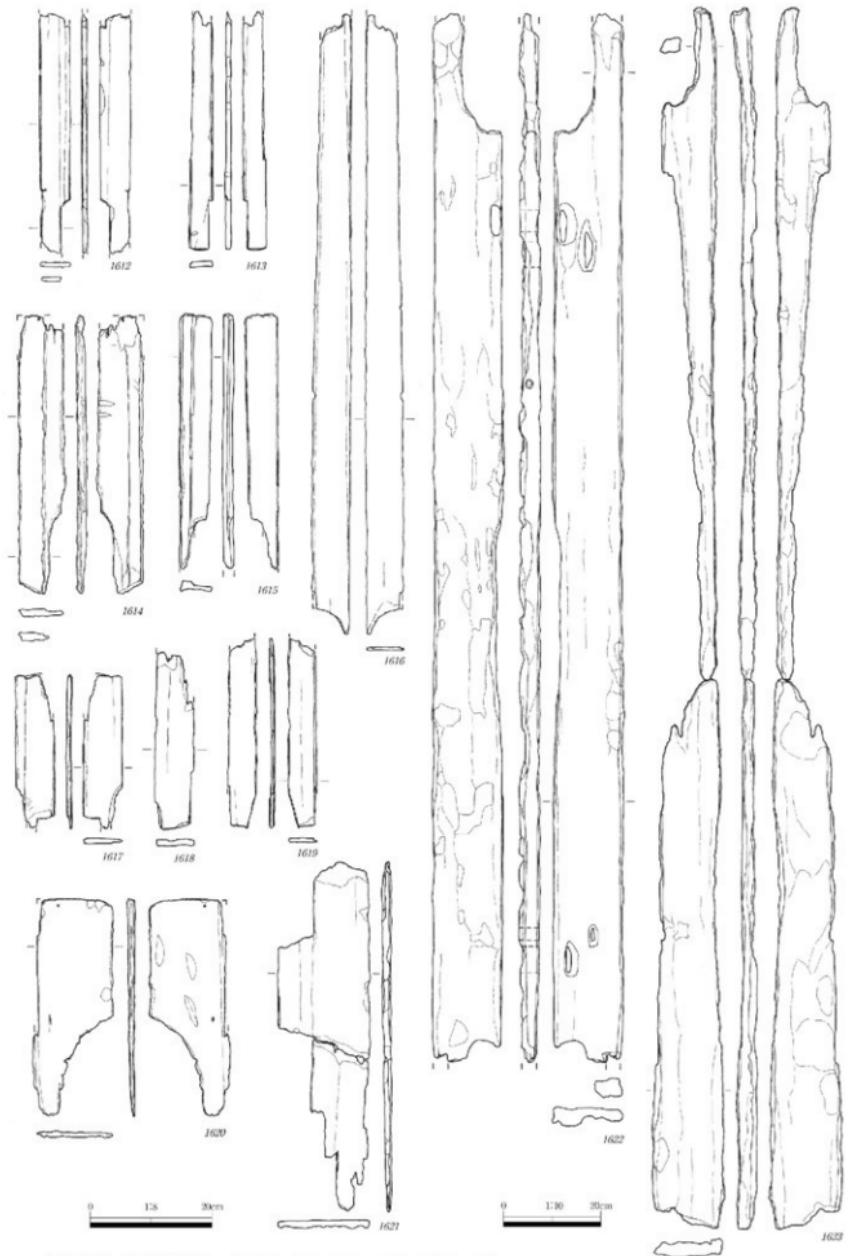
第262図 遺物実測図 (1585~1595 1/4, 1596 1/2)
 谷C6 (1586~1594) 川2C6 (1595) SE117C6 (1585) SE161C3 (1596)



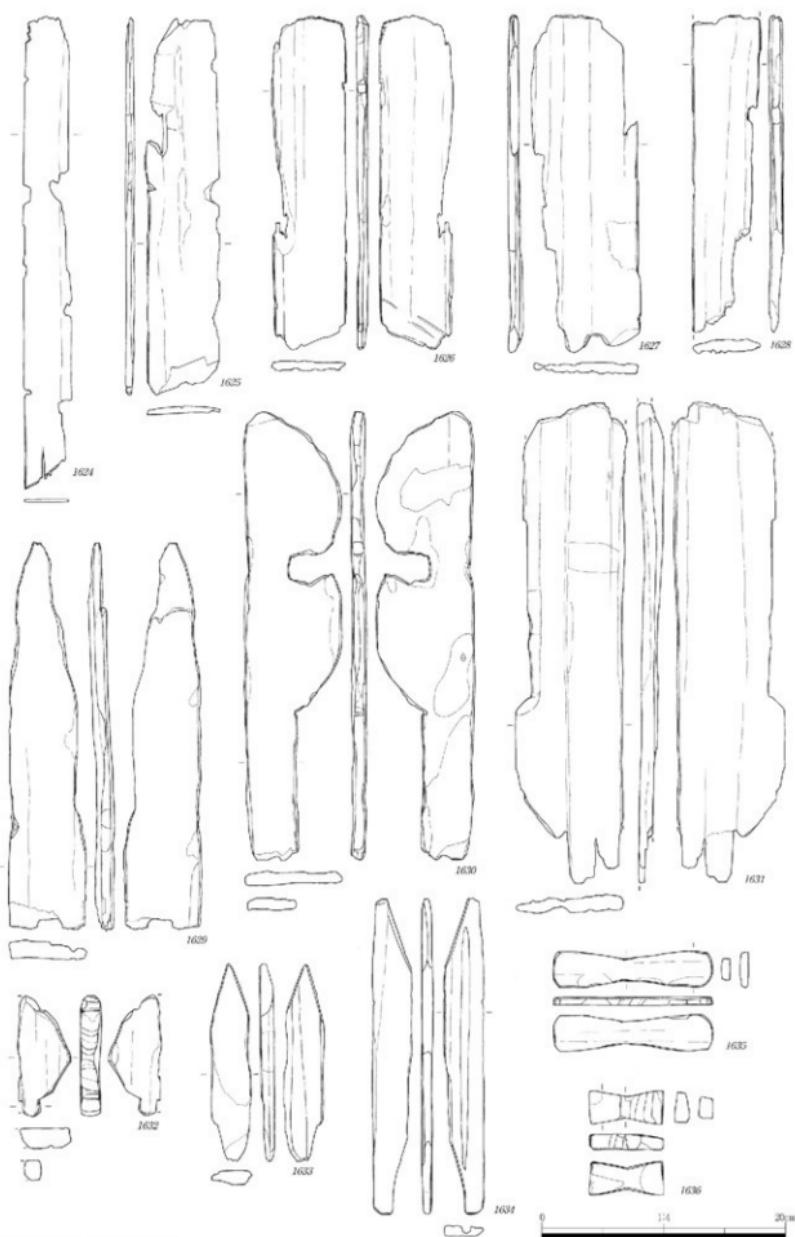
第263図 遺物実測図

谷C6 (1597~1600・1602・1604~1607・1609~1611) 川C6 (1608) SE117C6 (1601・1603)

4 遺物



第264図 遺物実測図 (1612~1621 1/8, 1622・1623 1/10)
谷C6 (1612~1623)



第265図 遺物実測図

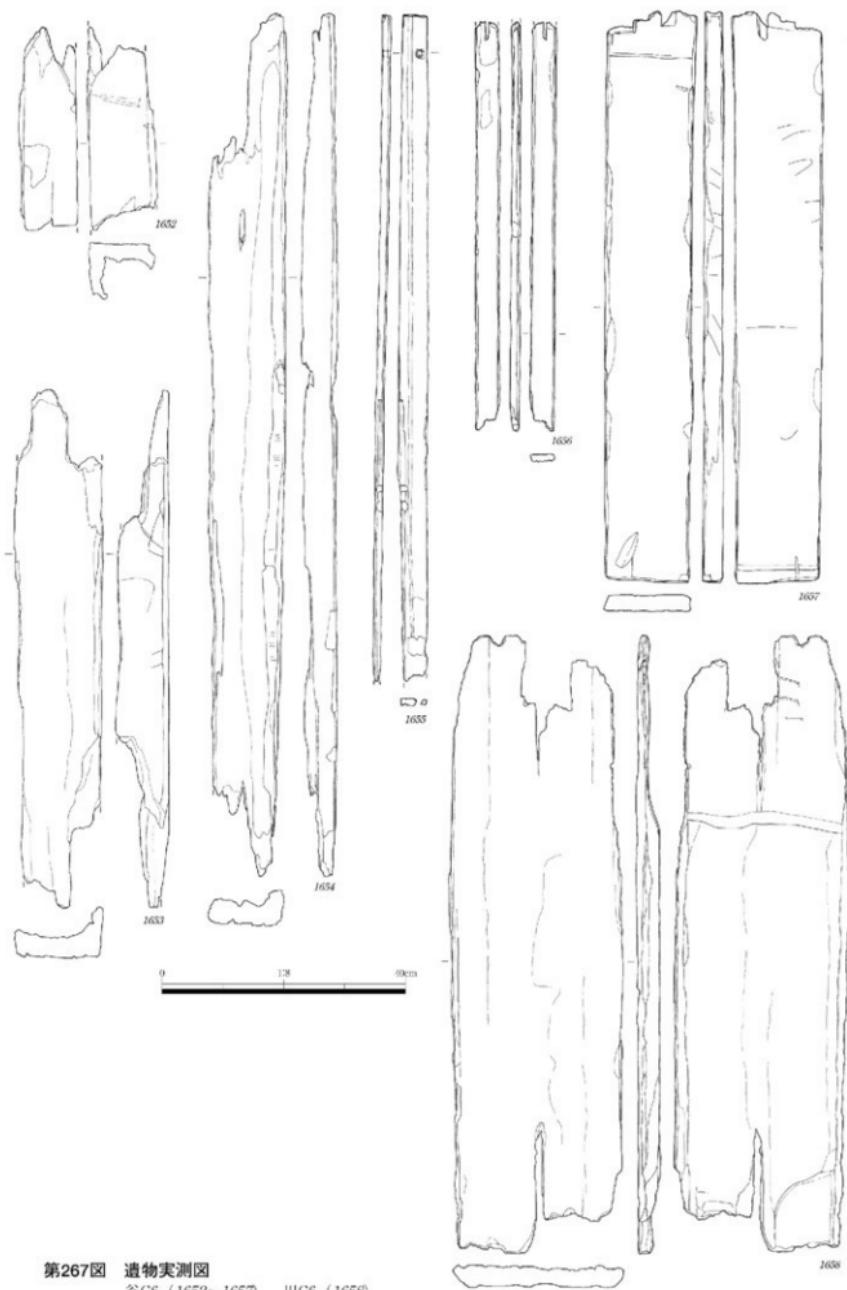
谷C6 (1624~1629・1631・1632・1635) 川C6 (1636) SK115C6 (1630) SD600C6 (1634)
SP723C6 (1633)

4 遺物

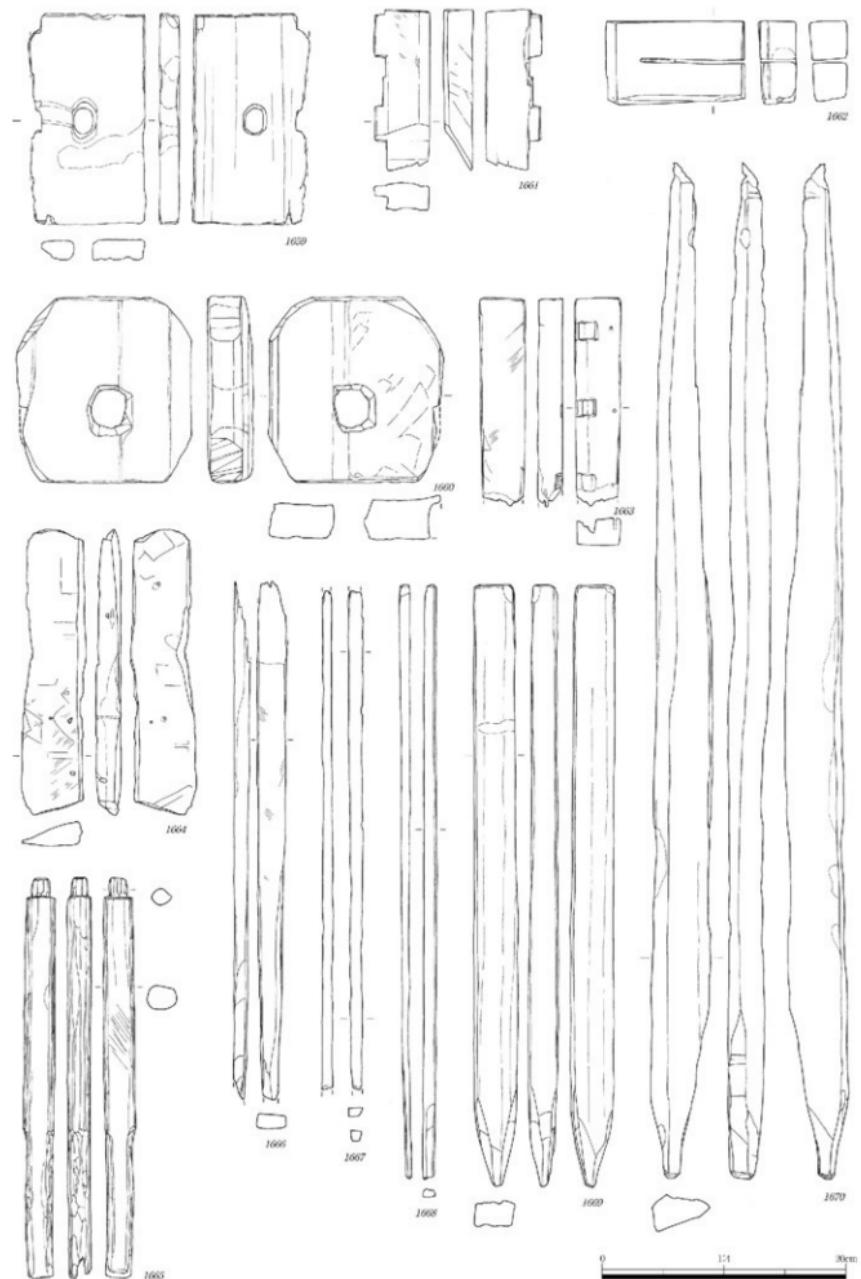


第266図 遺物実測図

谷C6 (1648~1651) SP113C6 (1646) SP246C6 (1647) SP528C6 (1638) SP671C6 (1639)
 SP672C6 (1640) SP794C6 (1645) SP852C6 (1644) SP856C6 (1641) SP861C6 (1642)
 SP906C6 (1643) SP968C6 (1637)

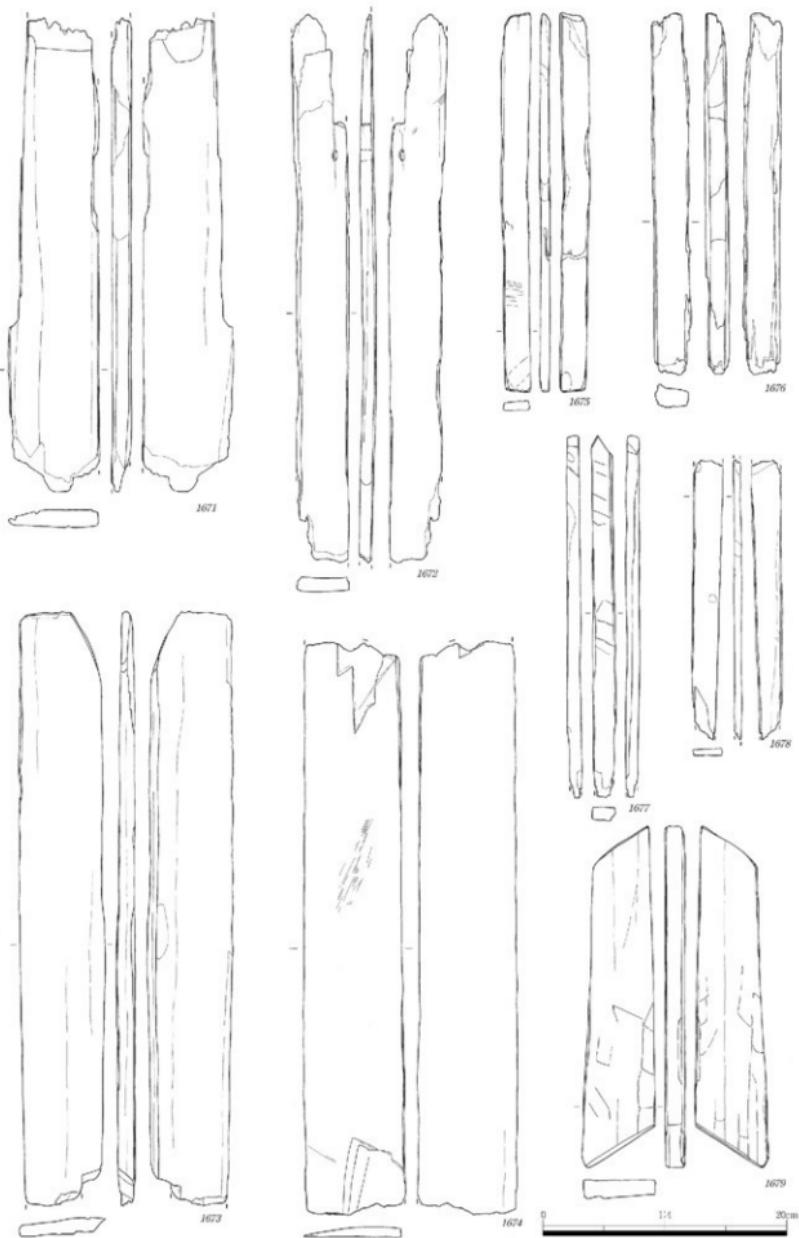


第267図 遺物実測図
谷C6 (1652~1657) 川C6 (1658)

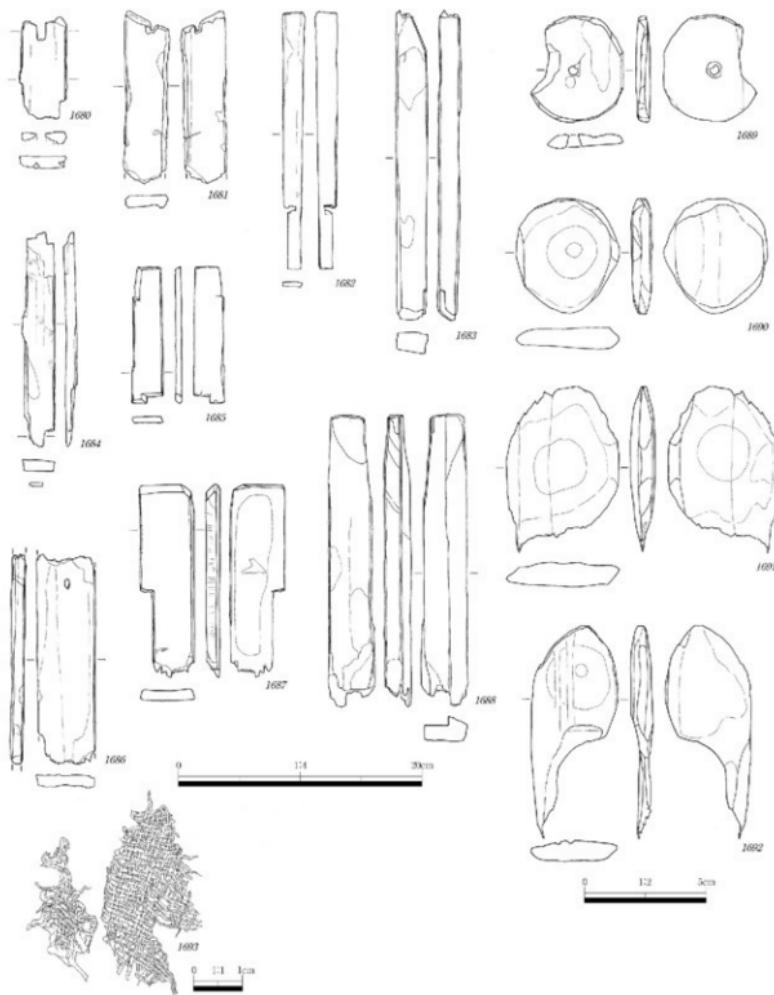


第268図 遺物実測図

谷C6 (1659~1670)

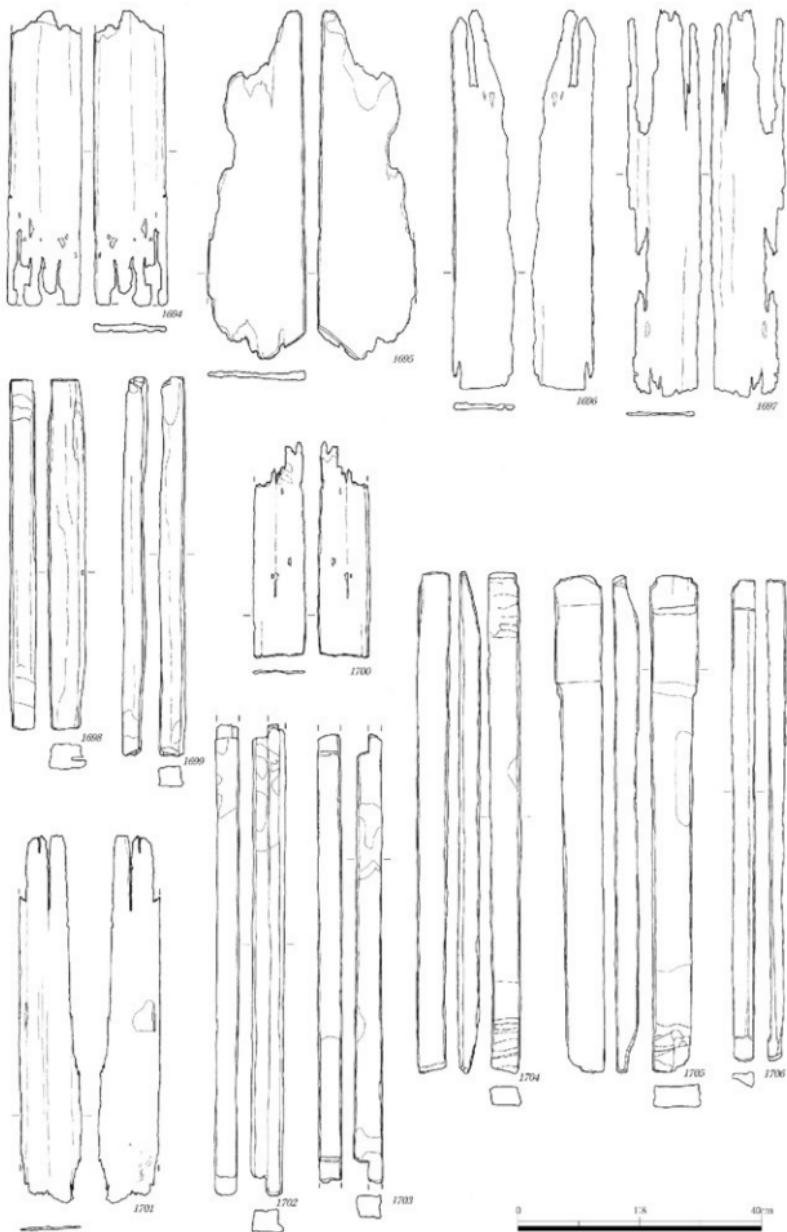


第269図 遺物実測図
谷C6 (1671~1679)

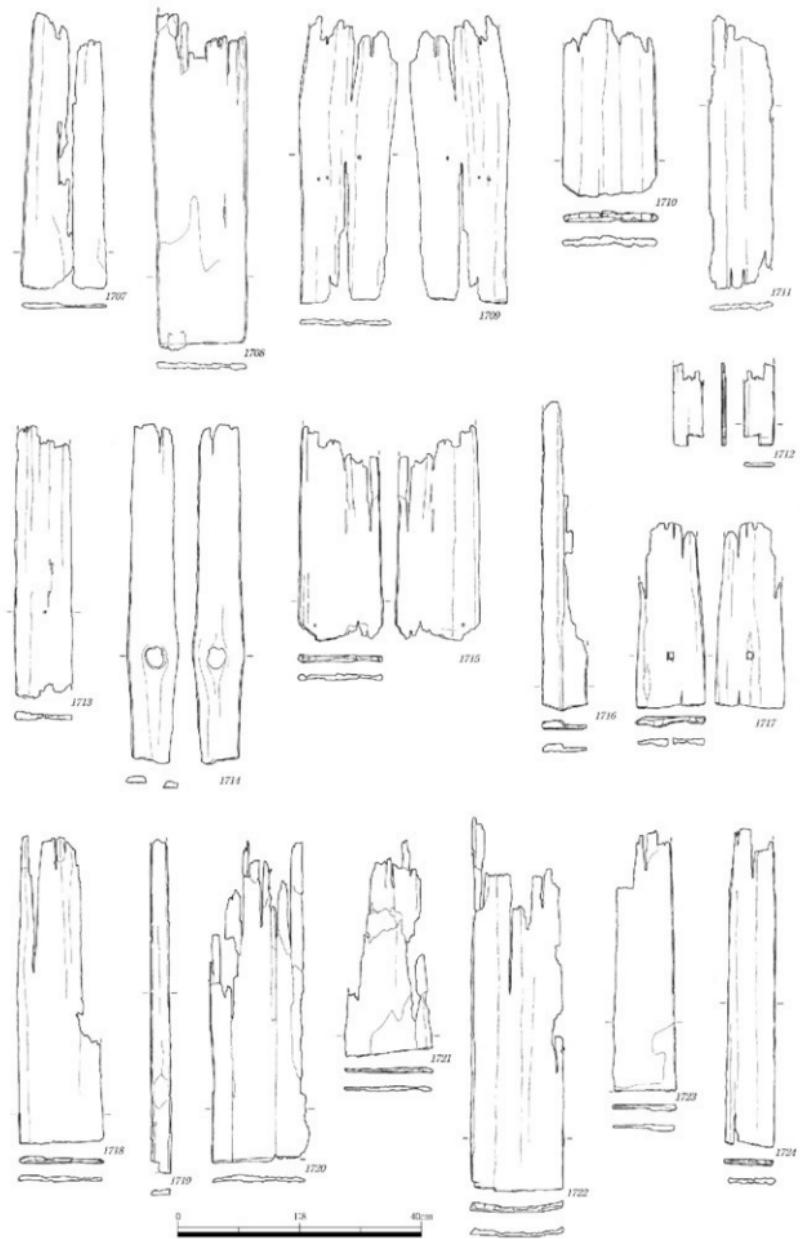


第270図 遺構実測図 (1680~1688 1/4, 1689~1692 1/2, 1693 1/1)

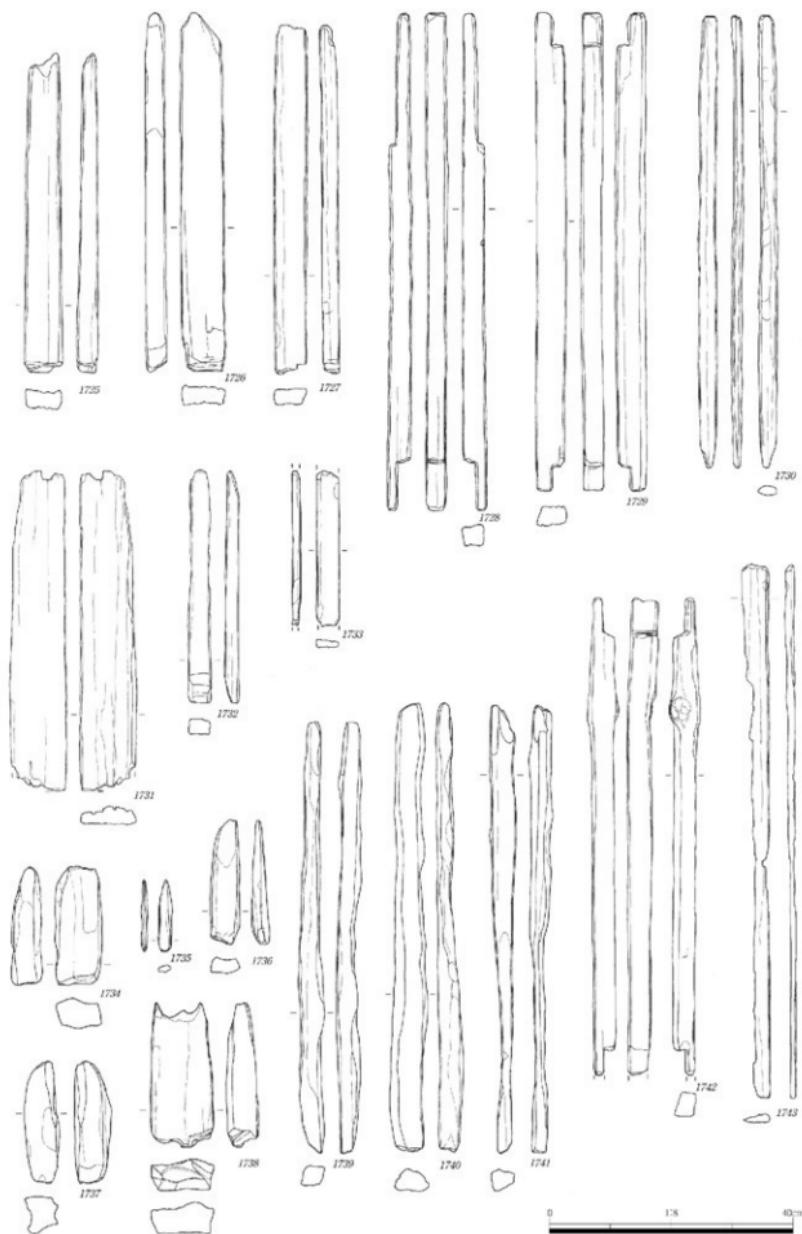
谷C6 (1680・1681・1684・1686) 川C6 (1689) SE1C6 (1683) SE117C6 (1682・1685)
SE820C6 (1688) SK4A5 (1693) SK13A5 (1690~1692) 包含層 (1687)



第271図 遺物実測図
SE2C6 (1694~1699) SE61C6 (1700~1706)

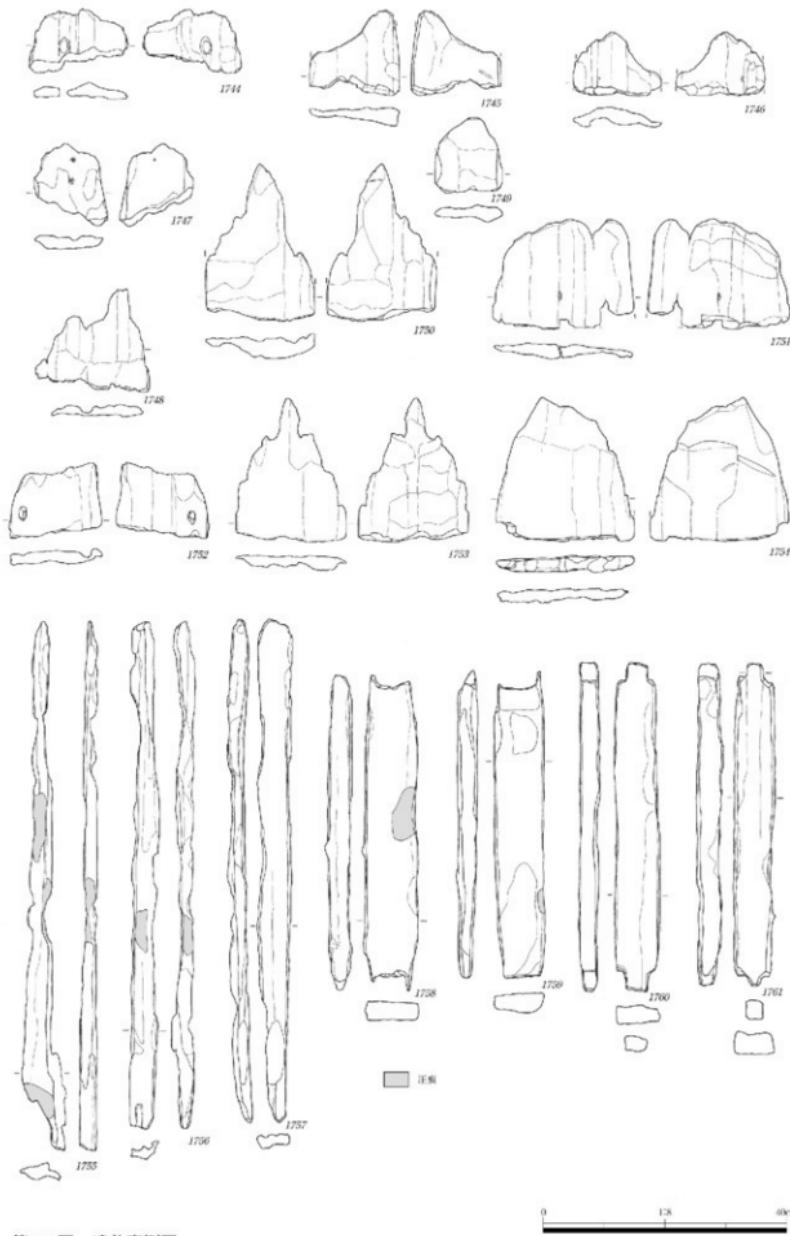


第272図 遺物実測図
SE820C6 (1707~1724)

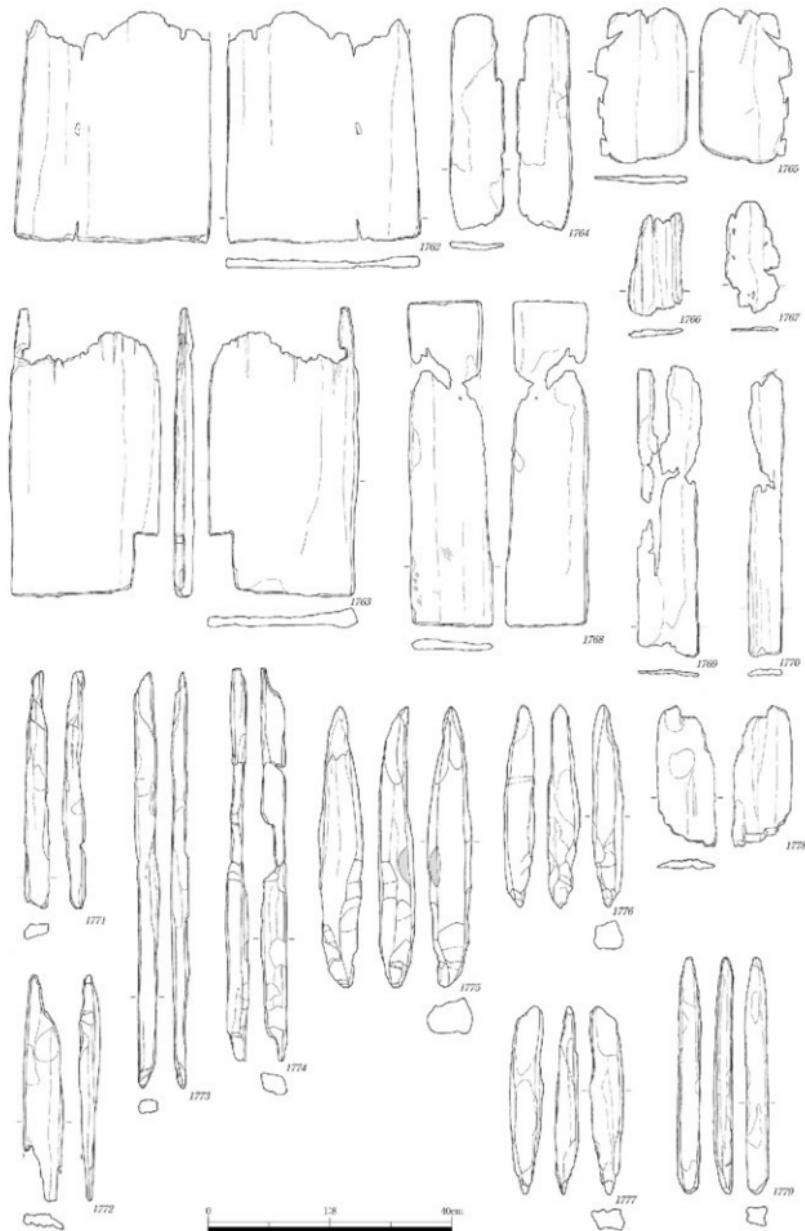


第273図 遺物実測図

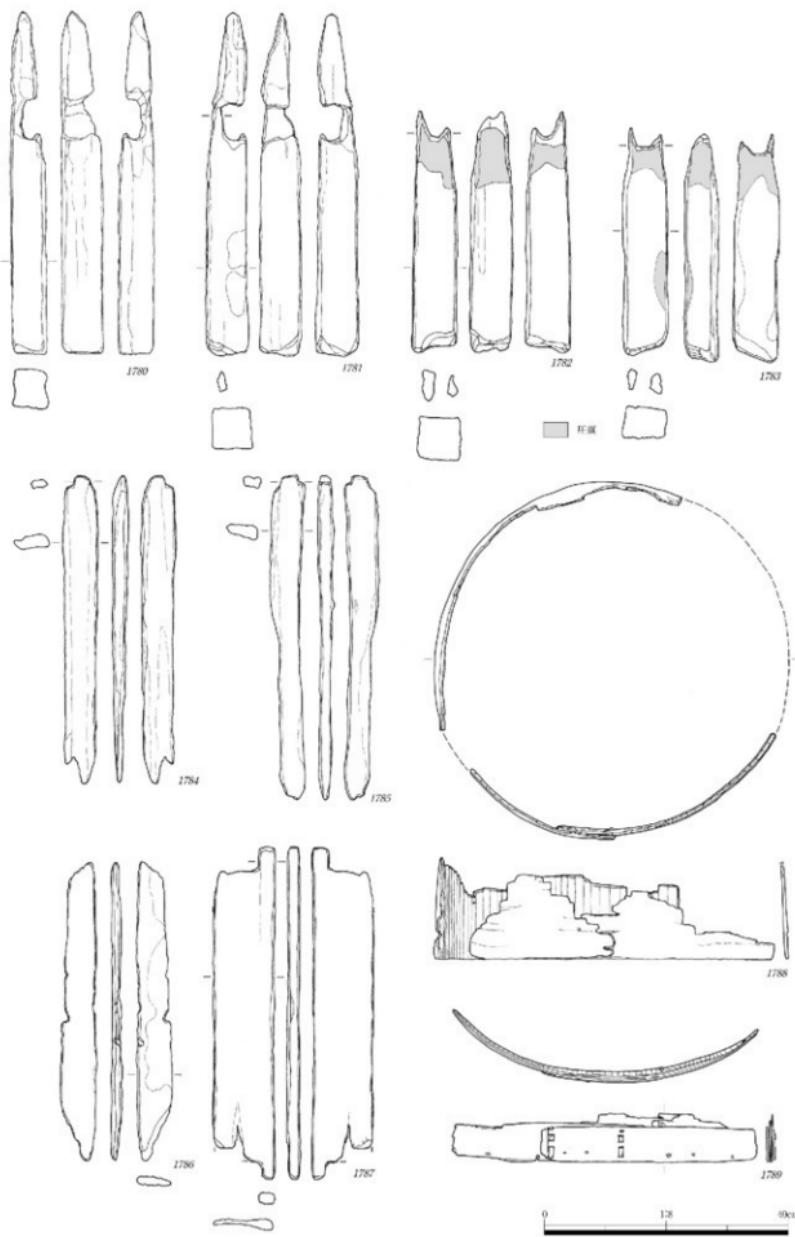
SE15C2 (1734~1741) SE820C6 (1725~1733・1742・1743)



第274図 遺物実測図
SE30C3 (1744~1757) SE185C3 (1758~1761)

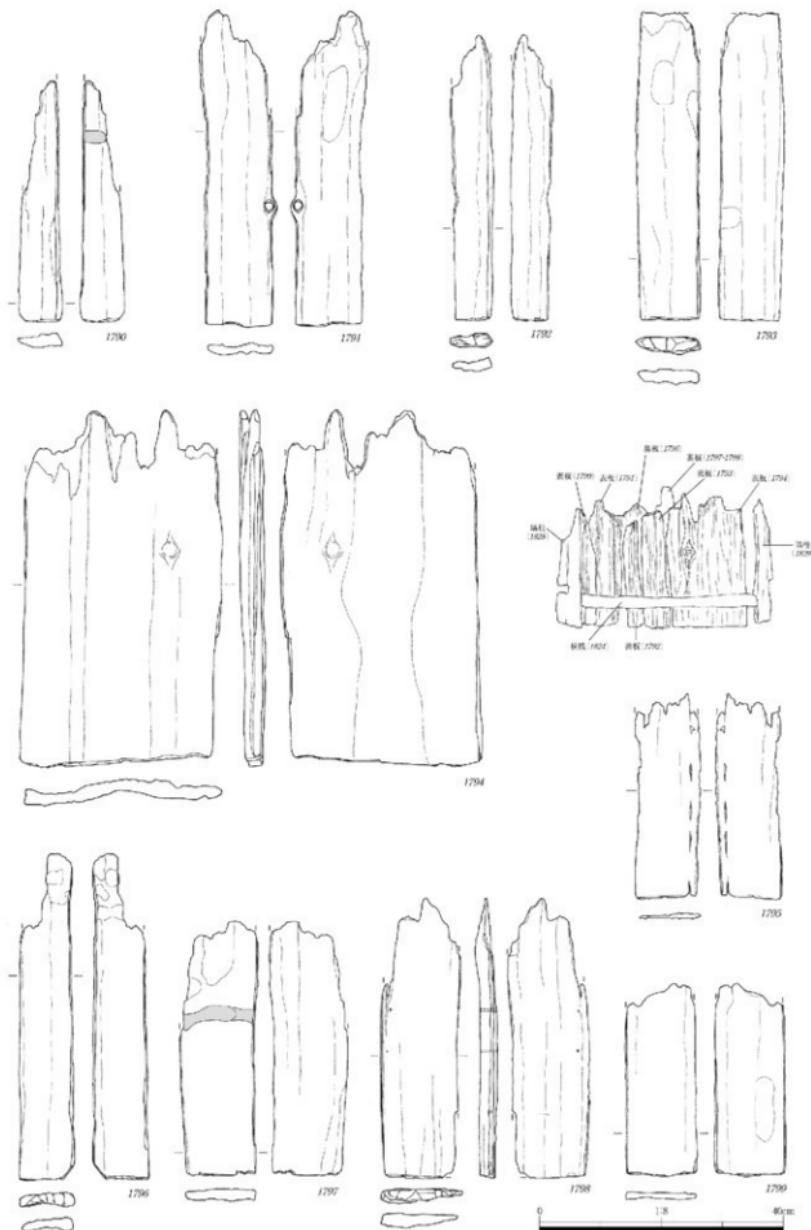


第275図 遺物実測図
SE161C3 (1762~1779)

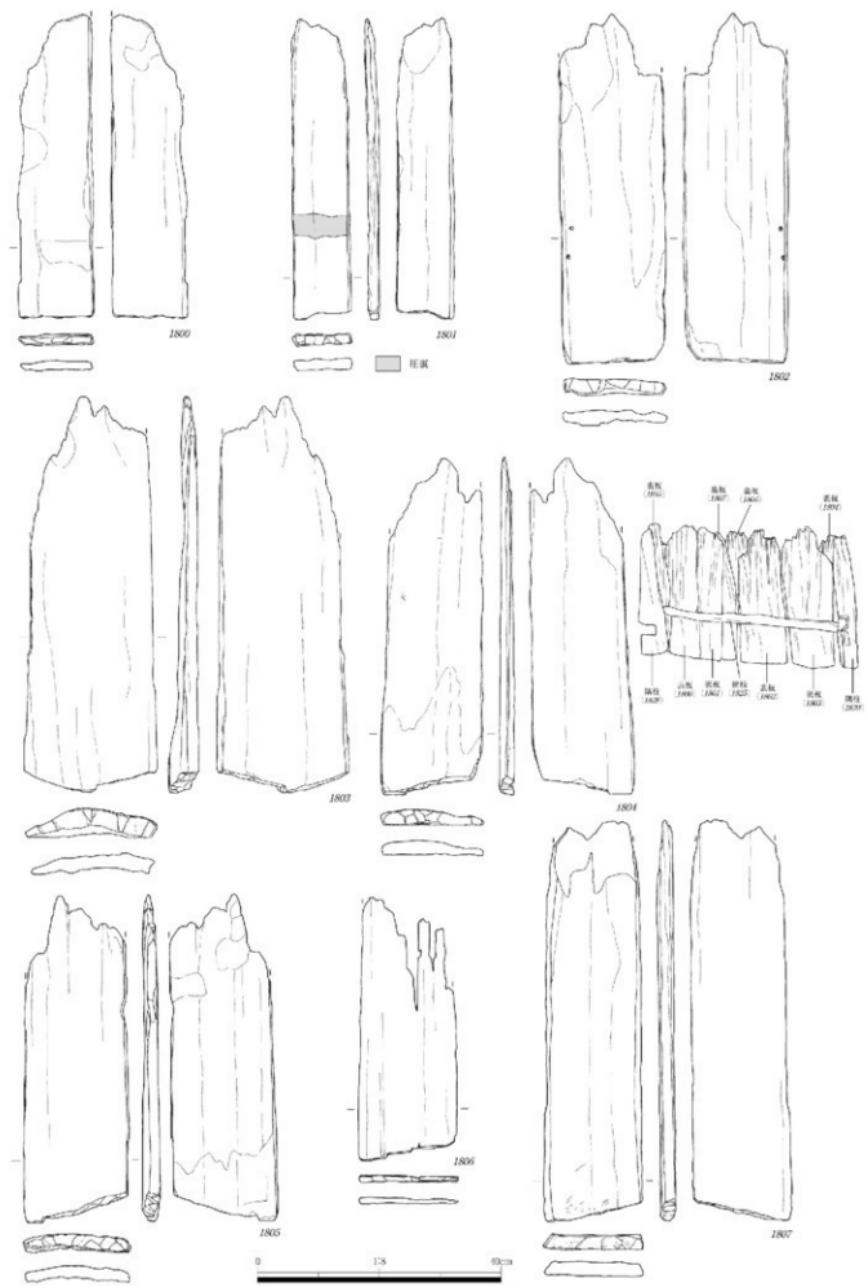


第276図 遺物実測図

SE103C3 (1788) SE161C3 (1780~1783) SE179C3 (1784~1787) SE159C4 (1789)

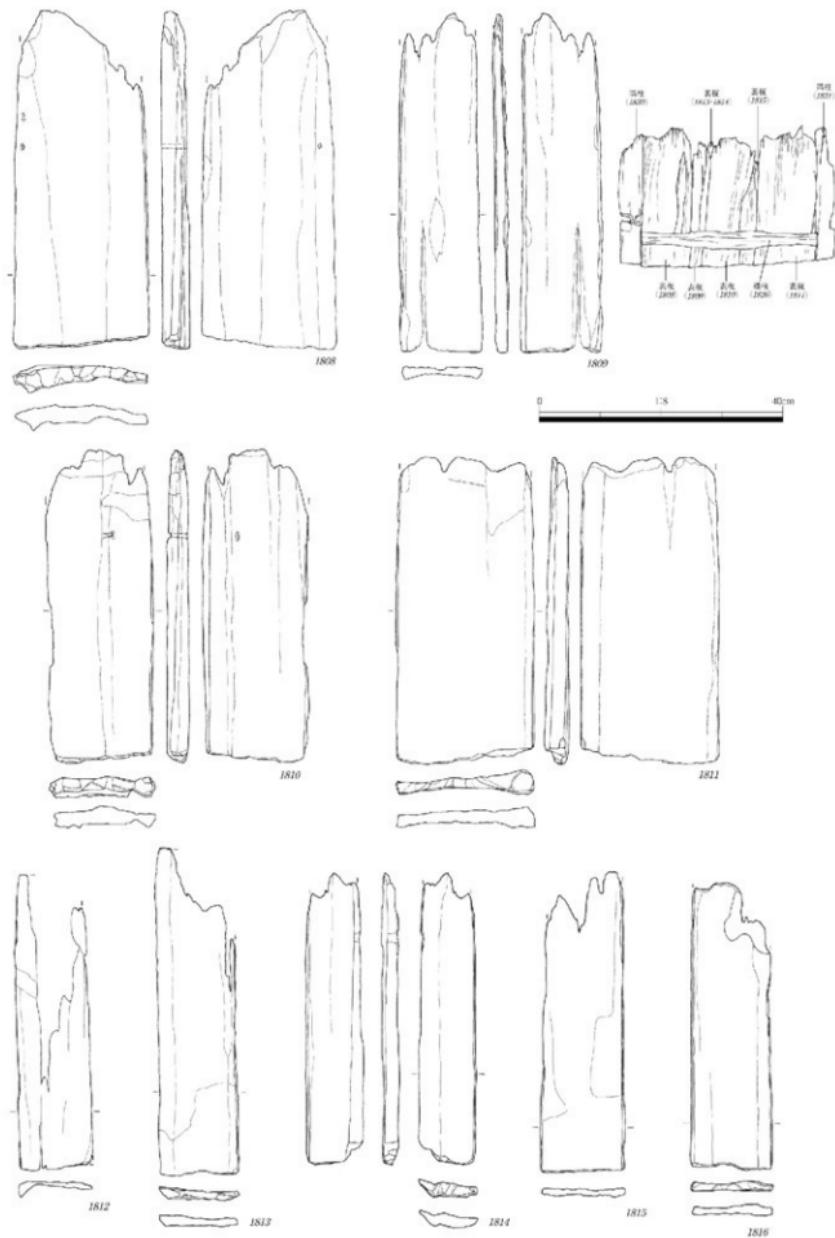


第277図 遺物実測図
SE19C4 (1790~1799)

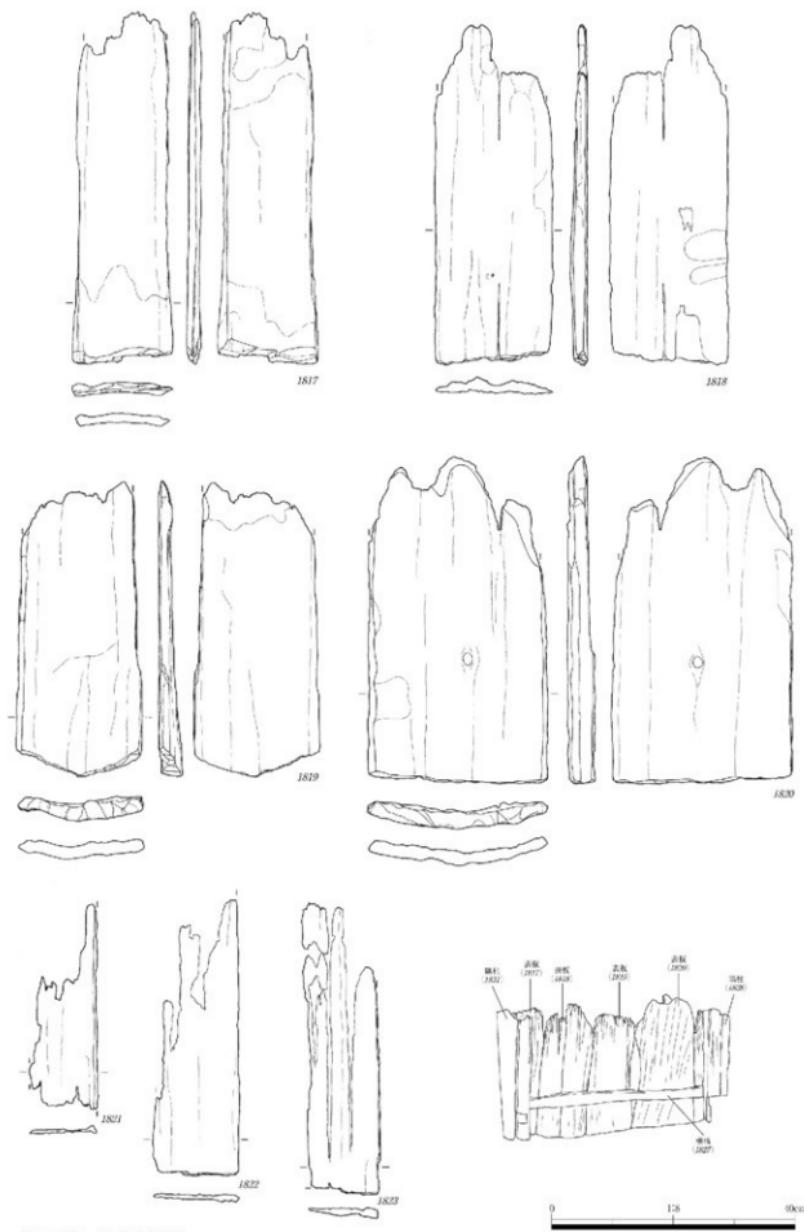


第278図 遺物実測図

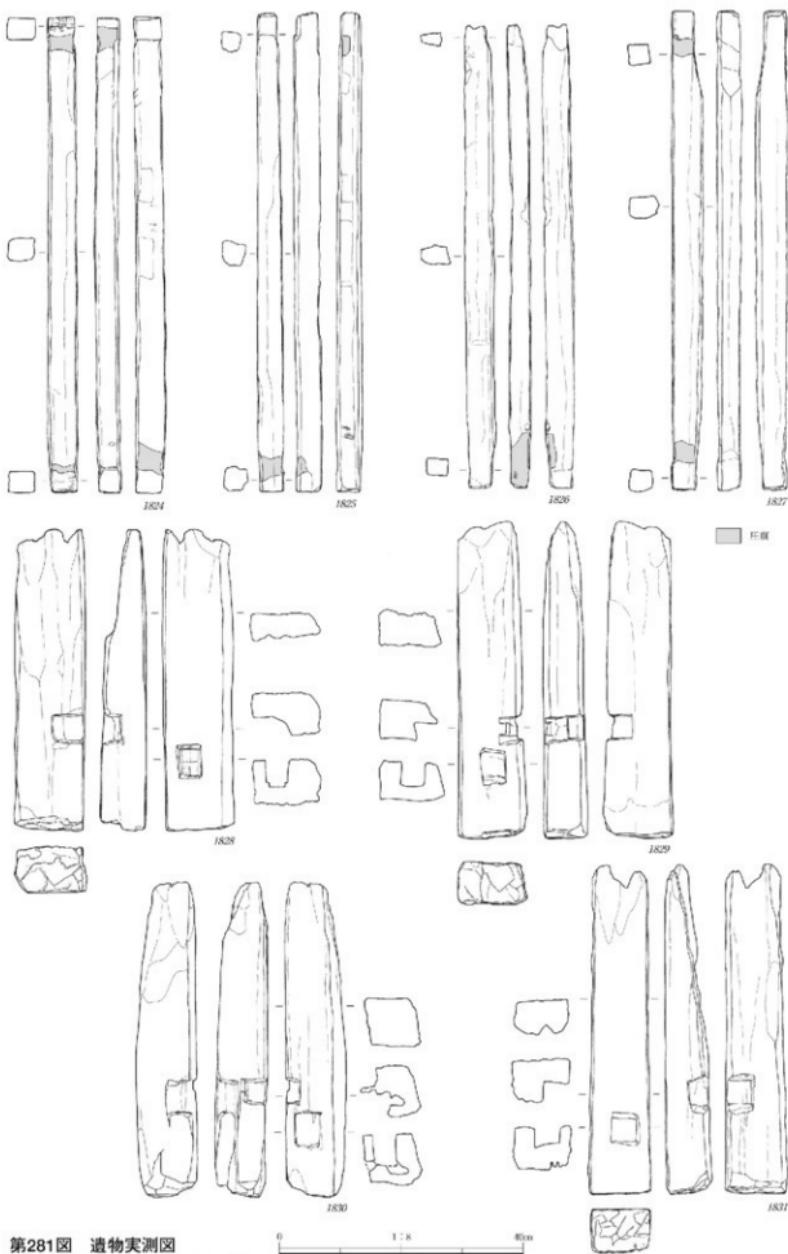
SE19C4 (1800~1807)



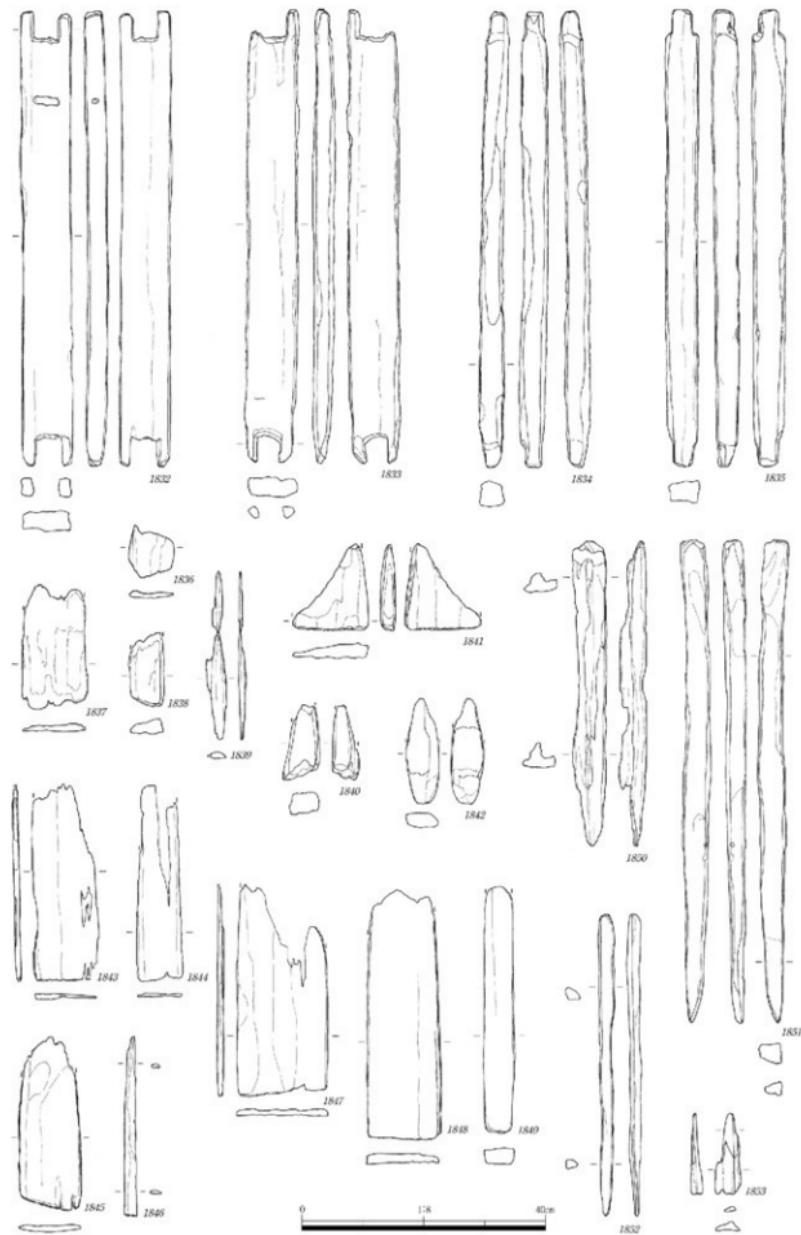
第279図 遺物実測図
SE19C4 (1808~1816)



第280図 遺物実測図
SE19C4 (1817~1823)

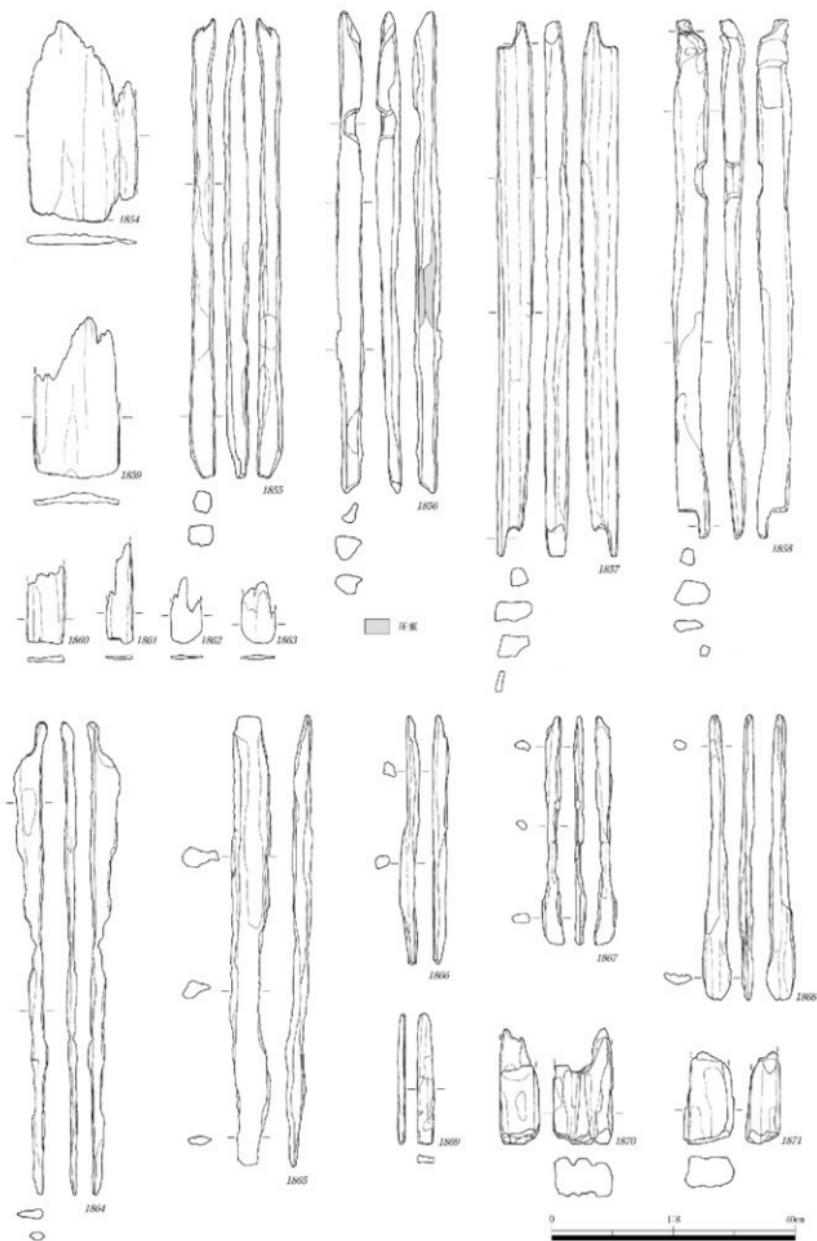


第281図 遺物実測図
SE19C4 (1824~1831)



第282図 遺物実測図

SE3B9 (1850~1853) SE59B11 (1836~1840) SE111B11 (1841・1842) SE108B11 (1843~1849)
SE140B13 (1832~1835)



第283図 遺物実測図

SE39A9 (1865~1871) SE226B3 (1864) SE8B9 (1859~1863) SE26B9 (1854~1858)

(4) 石製品 (第284~291図1901~1978、図版74~77)

1901~1940は砥石で、出土石製品で最も多い。

1901~1906は古代の堅穴建物 SI 213C 2、SI 701B13、SI 302C 4、SI 652A 4の出土である。大型の1906はSI 652A 4のカマド袖石として使用されていた。

1902は古代のSI 703B13から出土した荒砥とみられる。

1907~1940は中世~近世の砥石。これらについて、出土はほぼ中砥、仕上砥に限られており、擦痕から農作業用の鋤鎌等に使用したとみられる。さらに、日常的に使用頻度の高い中砥が多いことから、典型的な農村集落での出土パターンであるとの見解を得た³³²。使用石材をみると全国各地の砥石産地の製品、広域に流通するいわゆるブランド商品が目立ち、中砥は上野、伊予、天草、浄教寺、備水など、仕上砥は鳴滝中山などがある。

1908は仕上砥で、端材を利用したもの。1921も仕上砥だが、深い擦痕がみられ、中砥として用いられていたようである。1923は菱形の材を短冊状に切り出した製品か。1930は砂岩礫の破片だが、堅い石質から砥石に利用されたと考えられる。

1941~1953は五輪塔で、石材は常願寺川水系の安山岩および凝灰岩を使用している³³³。近代まで墓地であったA 5地区からの出土が多い。

1941、1942は空風輪で全体的に摩耗している。1943~1947は水輪であるが、1946、1947は内側を削り抜き、手水鉢に転用したものである。1946は転用で逆位となり、「パン」の梵字への注意は低いようである。1947は削り抜きの細かい加工痕が明瞭である。1948~1953は地輪。梵字「パン」が彫られた1948は整った立方体であるが、その他は接地面とみられる底面にほとんど加工がなく、自然の石肌を残したままである。

1954、1955は茶臼の下臼である。1954は受け部を打ち欠いたように欠損、1955は受け皿部分のみである。

1956~1962は石臼で、1956~1960が上臼、1961~1962が下臼である。副溝は概ね8分画だが、本数にはばらつきがある。石臼の石材も五輪塔と同様、地元山来の安山岩および凝灰岩である。

1963~1965は扁平な円形碟で、表裏両面の中央を窪ませた凹み石に似た形状。1964、1965では中央の孔が貫通する。1965の孔は方形で、何かを通す、あるいは嵌めるなどして使用したものであろうか。

1966、1967は切石。1968は瑪瑙の石核か。1969は磨製石斧で蛇紋岩製。1970は自然流路から出土した打製石斧で、全体的に摩耗している。

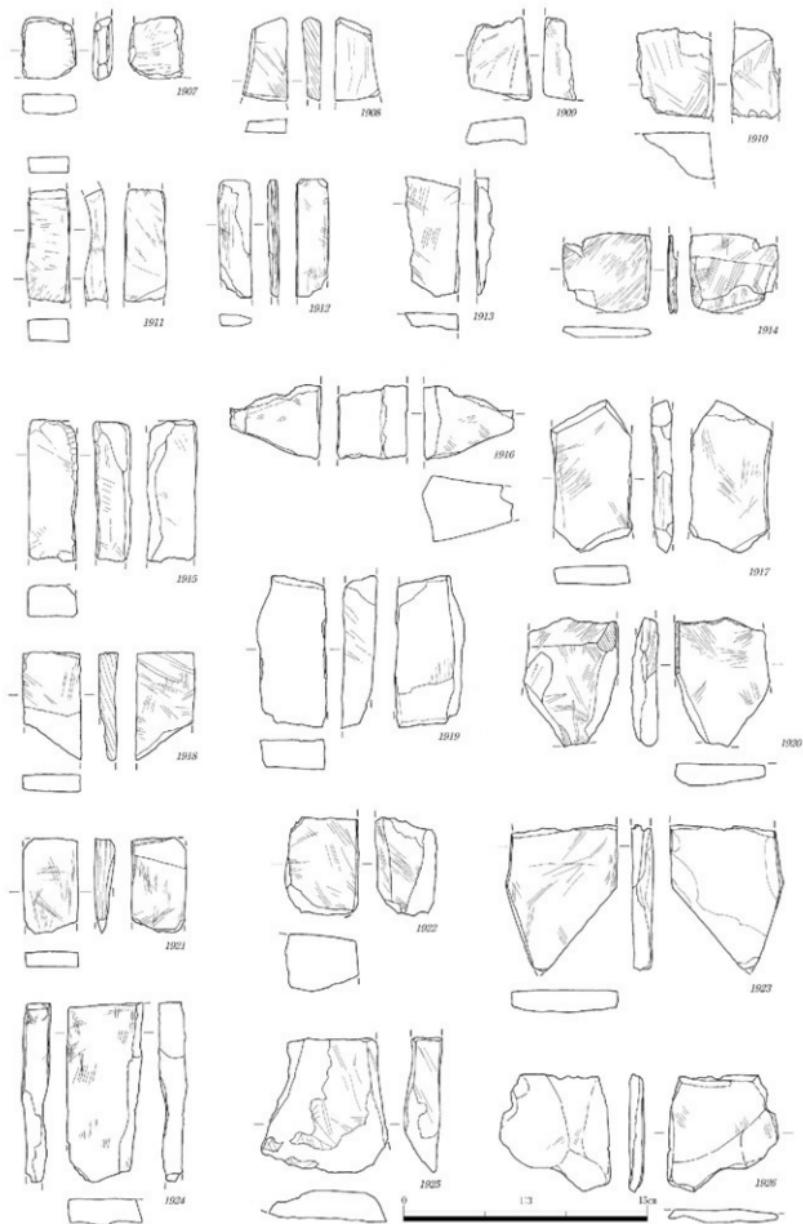
1971~1976は硯。高島産が多い³³⁴。1972は小型で、朱墨痕が残る。裏面に補修痕、側縁には黒漆状の塗装痕があり、硯を修繕する際、外枠に埋め込んで直した跡と推測される。1973は全体形が自然面を残す中世にみられるタイプである。表裏とも硯面に利用しているが、梢円形の面が破損した後、裏面を方形に彫ったとみられる。1975、1976は近世に帰属し、裏面には地名、人名等の線刻がなされる。

1977は碁石。1978は滑石製石鍋の鋸部分で、西彼杵半島産の石材とみられる。



第284図 遺物実測図

SI652A4 (1906) SI701B13 (1903・1904) SK703B13 (1902) SI213C2 (1901) SI312C4 (1905)



第285図 遺物実測図

SD1A4 (1924) SK3A8 (1913) SD356A11 (1907) SK82B2 (1922) SD1B3 (1916)
 SD1B9 (1915) SD17B9 (1911) SK422B13 (1909・1926) SK61C3 (1917) SK264C4 (1908)
 包含層 (1910・1912・1914・1918～1921・1923・1925)



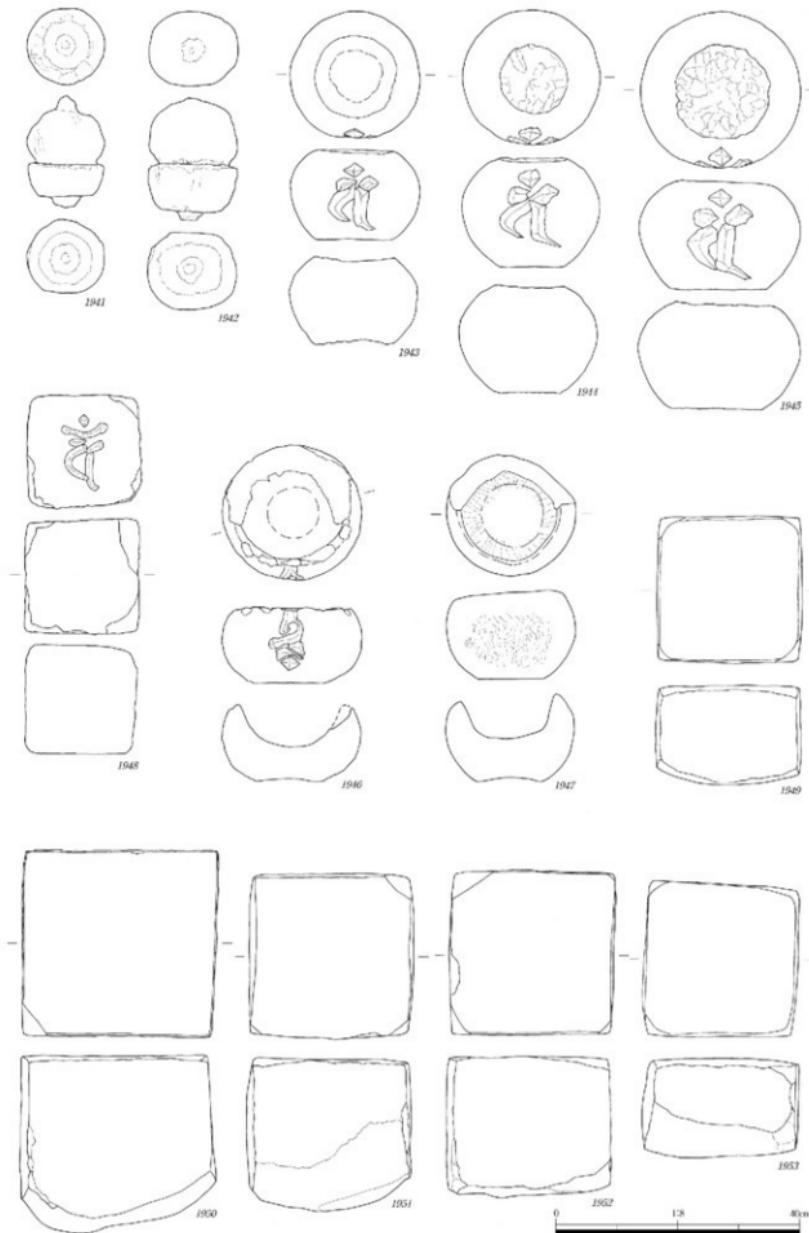
第286図 遺物実測図

SK294A2 (1929) SD1B11 (1930) SD4B11 (1927・1936) SK422B13 (1931)
包含層 (1928・1932・1935)



第287図 遺物実測図

SK318A2 (1937) 包含層 (1938~1940)



第288図 遺物実測図

SD1A5 (1945) SK4A5 (1949・1952) SD13A7 (1948) SD5B7 (1941) SD16B9 (1947)
SK39B9 (1946) SE114B10 (1943) 包含層 (1942・1944・1950・1951・1953)